

ISSN 2433-345X

言語文化研究 徳島大学総合科学部  
第三十一巻 別刷 二〇二三年十二月

中川劍岳の「鳴門峽二首」をめぐって

―作品の発表の経緯と日中詩史における位置

大村 和人



## 中川劍岳の「鳴門峽二首」をめぐって

### ―作品の発表の経緯と日中詩史における位置

大村 和人

〈序章〉阿波・徳島の人々の鳴門漢詩

(一) 本稿の対象

筆者はかつて日本の漢詩人(1)が鳴門海峡を描いた漢詩(以後、「鳴門漢詩」と呼ぶ)や漢文を取り上げ、それらに見られた特徴や、それらの中国古典文学史と日本漢詩文史における位置を論じたことがある(2)。

筆者が別稿一で論じたのは日本全国の有名な漢詩人の作品であり、阿波国の作者による作品は除外した。江戸や大坂・京都という日本の文化を牽引した大都市で活躍した漢詩人たちの作品は、当然のことながら日本の漢詩壇の動向を知る上で重要である(3)。しかし、江戸時代以降にはそれ以外の地方においても漢詩人は数多く存在し、各地で活発な活動を繰り広げ、大都市の漢詩人たちとも交流した。彼らの作品の中には大都市の詩風を模倣したものも存在したが、それに止まらず、特異な作品・活動も見られる。それらもまたその時点

における日本漢詩、更には言えば日本文学の一つの姿であると言える。本稿は別稿一の欠を埋めるべく、阿波国および徳島県の作者が制作した鳴門漢詩を概観し、その中で注目すべき作品を取り上げたい。

## (二) 阿波国・徳島県の漢詩人の手による鳴門漢詩の分類

まずは阿波国・徳島県の漢詩人の手による鳴門漢詩を、題名と内容によって分類しよう。

## 大 村 和 人

ここで使用する基本テキストは鳴門市史編纂委員会編『鳴門市史・別巻 鳴門に関する文芸作品集』(鳴門市、一九七一。以降、『鳴門市史・別巻』と呼ぶ)の「漢詩」の部の「阿波・徳島県」の項(同書七九〇―八九一頁)であり、そこに収録されている百四名の作者の三百二十二首を対象とする。結果は以下の通りである。項目は別稿一の分類に出来るだけ合わせたが、中には新たに設けた項目もある。各項目の結果に関するコメントも( )で付記した。

### ① 題詠(「題」)、「八景」、「雑詠」、「夢」…一五

② 題画…六首  
③ 無題・失題…九首(題名が残っていないだけで、元々他の題名が付されていた可能性もある。但し、内容を見れば、ほとんど①か④⑤⑦あたりのものに近い。)

④ 「即目」(題名に「即事」、「所見」、「寓目」という語を持つ作品も含む)…七首

⑤ 「偶成」…三首(以上二種は、以下の⑥⑦の場合もあり得る。)

⑥ 行旅(「過」)、「渡」…一四首

⑦ 遊覧(「観」)「看」…六九首(贈答の作もあるが、内容に相手のことが詠われず、ほとんど鳴門の情景等が描かれたものはこちらに分類した。)

⑧ 風俗・名産(「竹枝」)…一一首(実際に海峽を目睹して制作した場合もあれば、既存のイメージに基づ

いて詠った場合もあり得る。また、①の「八景」「雑詠」の中のこのような性質の作品はこの項目に分類した。）

⑨ 懐古・詠史…一首（①の「八景」「雑詠」の中のこのような性質の作品はこの項目に分類した。）

⑩ 宴集…一首

⑪ 唱和…一首

⑫ 次韻…三首

⑬ 分韻…三三首（以上四種は宴などの場で詠われたと思しきものが多く、内容は①か④か⑦あたりのものに近い。）

⑭ 留別・送別…三首

⑮ 贈答…四首（以上の二種は相手の状況や事情に言及したものである。）

⑯ 皇室行幸祝賀…二首（これは他県出身の漢詩人の作の中には無い。）

⑰ 政策提案…二首

右のほとんどの項目と実際の作品の内容は、別稿一で取り

上げた他県の作者の作品とあまり変わらない。しかし、右のリストを見渡した結果、顕著に認められる特徴として、⑬「分韻」が多いこと、⑯「皇室行幸祝賀」の作品と⑰「政策提案」の作品が見られることを挙げることができる。

「分韻」とは、詩会で各自が韻字を分け合い、各作者は自分が割り当てられた韻字で詩を作るという制作形態を指し、主題は共通であることがほとんどである。「皇室行幸祝賀」は、具体的に言えば、明治四十一（西暦一九〇八）年四月に時の皇太子、後の大正天皇が阿波行幸の際に鳴門も訪問したことを詠った作品である。この内訳は福田天外の一首と中西長水の一首である。このような天皇や皇室の行幸を詠った作品自体は、明治期の日本漢詩では珍しくない。そして最後の「政策提案」が、中川劍岳の「鳴門峽二首」である。この二首は題名を見れば①のようにも思えるが、実際には政策の提案とそれへの世間の反応に対する心情を詠ったものである。

これらの中で本稿が主な研究対象として取り上げるのが、劍岳の「鳴門峽二首」である。これから本稿ではこの二首の漢詩と発表の経緯を分析し、そこから得られた結果に基づいてこの作品の制作目的を考察する。そこから更にこの作品を

中国古典詩や他の日本漢詩と比較することによって、当時の地方の漢詩人の作品の水準および漢詩観と、日本の漢詩壇の状況の一端を探りたい。

〔第一章〕 中川劍岳の「鳴門峽二首」

(一) 中川劍岳について

作品を取り上げる前に、作者である中川劍岳の略歴を紹介する。彼は本名を虎之助といい、安政六(一八五九)年に徳

島藩の板野郡上板町神宅で政治郎の三男として生まれ、大正

十五(一九二六)年に徳島県で没した人物である。地元とちうの東光

福良塾ふくらじやうく(後述)で学んだ後、実家の製糖業を継ぎ、沖縄にお

いて製糖会社を設立したが挫折、後に台湾に移住し、そこで

製糖所を建設した(4)。これらの経験により、彼は日本の糖

業政策を改めんとして衆議院選挙に立候補し、当選した。そ

して大正三(一九一四)年、鳴門海峡に架橋し、この地で発

電を行うための調査を行うことを提案する建議書を帝国議會

の予算委員会に提出するが、否決される。後に郷里に戻り、

果樹栽培や畜産に従事する傍ら、徳島県の内外の人士とも盛

んに交流した。大正十五年に六十八歳で死去。以後、本稿で彼に言及する際には号を用いる。

右の劍岳の略歴は、子息である中川新作氏による『劍岳中川斥(虎―引用者注)之助年譜』(一九四二。以下、『年譜』と略す)に拠った。それによれば彼は実業家および政治家であったということになるが、漢詩人としての一面も持ち合わせていた。『年譜』の巻末には「遺稿」が付されており、二十五題・三十四首の漢詩が収録されている(後述)。但し、ここに収録されていない漢詩もある。

(二) 「鳴門峽二首」各作品の分析

① 「鳴門峽」其一

次に各作品を見よう。「鳴門峽二首」という題名は、大正十一年(一九二二)年に刊行された三谷象雲編『海南風雅』(後述)に従ったものである(5)。いずれも七言古詩。まずは其一の本文を挙げる。論述の都合上、各句の上に数字を付す。

1 鳴門壯觀天下鳴， 鳴門の壯觀 天下に鳴る，

- |    |          |   |
|----|----------|---|
| 2  | 自古海峽遺利横。 | 古より海峽 遺利横 <small>よこた</small> ふ。                     |
| 3  | 大聲難入俚人耳， | 大聲 俚人の耳に入り難し，                                       |
| 4  | 架橋發電有誰成。 | 架橋發電 誰か成すこと有らん。                                     |
| 5  | 潮流吐吞三萬里， | 潮流吐吞す 三萬里，  |
| 6  | 對此天嶮無妙技。 | 此の天嶮に對して妙技無し。                                       |
| 7  | 四季游客縱探勝， | 四季の遊客 探勝 <small>ほし</small> を縱 <small>ほし</small> にし， |
| 8  | 來往渡峽從神市。 | 來往渡峽 神市よりす。   |
| 9  | 汐漲金銀百雷呵， | 汐に金銀漲り 百雷 <small>ひか</small> 呵り，                     |
| 10 | 月氣絢爛奇趣多。 | 月氣絢爛として 奇趣多し。                                       |
| 11 | 獨凭海樓長嘯立， | 獨り海樓 <small>よ</small> に凭りて長嘯して立ち，                   |
| 12 | 欲問禹王策如何。 | 問はんと欲す 禹王 <small>うおう</small> 策 如何                   |
- と。(6)

主な語句の意味と典故を以下に述べる。第三句の「大聲」は高尚な音楽を意味する。そこから転じて高尚な内容の言説を指す場合も少なくない(7)。(ここでは次の句で述べられる、鳴門海峽の架橋と発電の案を指す。第九句の「金銀」は利益を指すとも考えられるが、そう理解すれば「百雷呵」と意味が繋がらない。ここはあくまで海流や渦潮の視覚的な美しさを

の比喩であると考えたい。また、海流や渦潮の音を「雷」に例えるのは鳴門漢詩の常套的表現であるが、これは先秦から南朝期までの詩文の名作を集めた『文選』所収の漢・枚乗ばいじやう「七發」に由来する(別稿一参照)。第十一句の「長嘯」は声を長く引く、独特の発声のこと。魏晋の前は悲しみの動作であったが、魏晋以後、道士、または超然としていることを表現する隠者の動作という意味も加わった(8)。ここでは語り手の孤独と苦悩と結びついているので、どちらかと言えば激情を表す動作であろう。必ずしも悲しみに限らない。

末句の「禹王」は、中国の伝説上の聖王で夏王朝の創始者とされる禹を指す。様々な文献において、彼は堯の下で黄河を始めとする各地の河川の治水に大きな成果を上げ、各地の開発も進めたとされる。禹の事績は『詩經』大雅「文王有聲」、『尚書』「益稷」「禹貢」「舜典」(以上、「五經」)、『孟子』「滕文公」上(以上、「四書」)、『墨子』「兼愛」中、『淮南子』「脩務訓」「人間訓」「要略訓」「主術訓」「詮言訓」「地形訓」、『楚辭』「天問」、『史記』「夏本紀」「河渠書」、『山海經』「海内經」等に見える(9)。その中でも『孟子』は禹の大々的な土木工事によって民衆がやつと生きていくことができるようになった

たと称賛する。

當堯之時，天下猶未平。洪水橫流，氾濫於天下。草木暢茂，禽獸繁殖，五穀不登，禽獸逼人。獸蹄鳥跡之道，交於中國。堯獨憂之，舉舜而敷治焉。舜使益掌火，益烈山澤而焚之，禽獸逃匿。禹疏九河，濶濟深，而注諸海，決汝漢，排淮泗，而注之江。然後中國可得而食也（堯の時に當たり，天下猶ほ未だ平らかならざるがごとし。洪水橫流し，天下に氾濫す。草木暢茂し，禽獸繁殖し，五穀登らず，禽獸人に逼る。獸蹄鳥跡の道，中國に交はる。堯獨り之を憂ひ，舜を擧げてこれを敷治せしむ。舜益をして火を掌らしめ，益山澤を烈き之を焚き，禽獸逃匿す。禹九河を疏し，濟深を濶め，諸を海に注ぎ，汝漢を決し，淮泗を排して，之を江に注ぐ。然して後中國得て食らふべきなり）。—『孟子』

「滕文公」上（10）

日本語訳を以下に示す。「堯の時、天下はまだ平和ではなかった。洪水が氾濫し、草木は繁茂し、禽獸も繁殖していた。

五穀も充分に生育せず、禽獸が人を脅かし、鳥や獸の跡が國中に入り乱れていた。堯だけがそれらのことを憂い、舜を推挙してそれらの対応に当たさせた。舜は益に火で山沢を焼き、鳥獸たちを追い払わせた。また、舜は禹に國中の河川の流れを整えさせ、濟水・溧水を浚ってそれらを海に注がせ、汝水・漢水の水路を切り開き、淮水・泗水の流れを変えて揚子江に流れこませた。これらの後、國中の人々はやっと五穀の收穫を得られるようになり、生きていくことができるようになった。ここで功績が挙げられている人々は禹だけではないが、堯は舜に命じただけで、舜は益と禹に具体的な対策を指示しただけであり、益よりも禹の功績の記述が具体的に詳しい。いずれにせよ彼らの系統だった事業により、中原の人々の生活が始めて安定したという。これらのことは歴史事実としては認めがたいが、重要なのは主要な儒教經典の一つである『孟子』に記されたことである。

詩において、例えば唐・杜甫の五言律詩「禹廟」の末二句は次のように詠う。

早知乘四載，  
早とに知る 四載とに乗り，



疏鑿控三巴。疏鑿して三巴を控く。(11)

この作品は、永泰元(七六五)年に杜甫が三峽を下る途中、忠州の禹廟に立ち寄って詠ったものである。頸聯までは杜甫が目撃した禹廟とその周囲の状況を描写する。右の引用部に見える「四載」とは、『尚書』「益稷」の孔伝に言う「水乗舟(河川では舟に乗る)」「陸乗車(陸では馬車に乗る)」「泥乗輻(泥濘では輻に乗る)」「山乗櫟(山岳地帯ではやまかごに乗る)」を指す(12)。「三巴」は蜀(現在の四川省)の三峽一帯の巴郡・巴東郡・巴西郡を指す。この末二句は禹が揚子江上流の治水を手掛けた時、右記の四種類の乗り物に乗り、三巴一帯を掘削して疎水を引いた言い伝えが昔から知られていたことを述べ、禹の業績を称える。この作品は、江戸時代後期の大ベストセラーで、寺子屋や私塾でもテキストとして採用された唐詩のアンソロジー『唐詩選』(後述)の巻三にも収録されており、江戸から明治にかけての漢詩人たちにはよく知られた杜甫の作品の一つであった。

その日本においては、遡って八世紀の文献に禹への言及が見え始め、京では治水神として信仰された。そして、江戸時

代に至って儒学が文治政策に採用され、中国古典が必読書となり、禹王の名も国中に広く知られるようになった。そして、

十八世紀前半頃から日本各地に禹王遺跡が登場し始めたという(13)。おそらく偶然であろうが、杜甫の「禹廟」を収録する『唐詩選』が日本でも流行し始めたのも、ちょうどこの時期であった。劍岳は「鳴門峽二首」其一において、鳴門架橋という四国の文明化を促進するであろう大規模な土木事業を提案しようとしており、その実現の良策を土木工事で有名な禹に問いたい、と詠っているわけである。

以上の語釈を踏まえた日本語訳を以下に示す。「鳴門海峽の壮大な眺めは天下に知れ渡っており、また古よりこの海峽には人がまだ手を付けていない富が横たわっている。偉大な音というのは卑俗な者の耳には入らない。鳴門海峽に橋を架け、ここで発電を行うことは誰によって成し遂げられるであろうか。潮流は三万里にわたって往来しているが、今はこのような天然の要害を上手くコントロールする技術は無い。各季節に旅行客がここを訪れて存分に見物するが、彼らは神戸市とここを往来する(ため、鳴門海峽に橋が架かれれば、神戸と四国との行き来が更に活発になるであろう)。潮流は金銀がち

りばめられたかのように輝き、百雷が叱咤するかのような物凄いい音を立て、それを月の光がきらびやかに照らし、世にもまれな趣を醸し出している。私は海峡を見下ろす楼閣に一人佇んで長嘯する。そして禹王に伺いたい、架橋と発電を実現させる妙案は無いものかと。

この作品は、第一・五・六・九・十句で鳴門海峡の豪壮で美しい風景を称賛し、ここに橋を架けて淡路と鳴門を結び、発電を行いことの経済効果は測り知れないと詠う。第二句・四句・七句から九句には鳴門海峡での架橋と発電およびその利益を直接的に述べることが注目される。また、それが難事業で、他人の理解を得難いことも語り手が承知していることは、第三・四句で詠われている。第十一句でも「獨り海樓に凭りて長嘯して立」つと詠い、語り手の孤独を象徴的に描写する。これらの裏返しとして、自身の構想を理解しない俗人たちへの侮蔑のことも第三句に見える。そして末句では伝説上の「禹王」に実現の方策を問う点も特徴的である。その他、鳴門海峡の描写に見られる表現は典型的なものではないが、海峡の風景描写の中で「汐漲金銀」という視覚的要素と「百雷呵」という聴覚的要素が見られる点は、他の鳴門漢詩

とも共通する（別稿一参照）。

以上のように、この作品には鳴門海峡の描写が見られるだけでなく、近代的な経済政策提言の直截的表現と、禹王という伝説上の聖王への言及という二つの相反する特徴が同居している。また、語り手自身の案を理解しない俗人への侮蔑と、その裏返しとしての自身の孤独を詠う点も注目される。

## ② 「鳴門峡」其二

次に其二を挙げる。

1	積水遠自萬里來，	積水遠く	萬里より來り，
2	阿淡如東山門開。	阿淡	束ぬるが如く
3	怒濤盤渦如奔馬，	怒濤盤渦	奔馬の如く，
4	烟波直接皓蕩天。	烟波	直ちに皓蕩の天に接す。
5	地方人士勿輕議，	地方の人士	輕議すること勿か
6	鳴門勝概拔其萃。	鳴門の勝概	其の萃を抜く。
7	架橋發電阿淡峽，	架橋し發電せん	阿淡の峽，

8 竣工豈只物資利。 竣工 豈に只だ物資の利のため  
のみならんや。

9 經世人物共可論、 經世の人物 共に論ずべし、

10 何關俗客弄評言。 何ぞ關せん 俗客の評言を弄す  
るに。

11 遠圖唯在通鐵路、 遠圖 唯だ鐵路を通ずるに在り、

12 洗刷區區鳴人魂。 區區たる鳴人の魂を洗刷せん。

13 電化潮流億萬力、 潮流を電化すれば億萬力、

14 颺車來往只瞬息。 颺<sup>ひよしや</sup>車來往すること只だ瞬息の

み。

15 當年俊傑未降山、 當年の俊傑 未だ山を降らず、

16 富國大計須達識。 富國の大計 達識を須ふ。

17 他日工成長峽阿、 他日 工成る長峽の阿、

18 招來禹王與女媧。 禹王と女媧<sup>じじか</sup>とを招來せん。

19 觀潮之興中秋節、 觀潮の興 中秋節、

20 當夜鳴門月如何。 當夜 鳴門の月 如何ぞや。(14)

主な語句の意味と典故を以下に述べる。第一句の「積水」

は大量に集まった水を指す。ここで海を指すことは言うまで

もない(15)。「怒濤盤渦如奔馬、烟波直接皓蕩天」二句は鳴門海峡の海流と渦潮の動きの激しさを描写する常套的表現で、波濤や渦潮を「奔馬」に例える表現も前述の枚乗「七發」に由来する(別稿一参照)。第九句の「經世人物」は世を治める人物。

第十一句の「遠圖」は長期的な視点に立った遠大な計画を意味する。『後漢書』卷三「肅宗孝章帝紀」元和三年の記事において、後漢の章帝がある詔の中で明帝の土木事業を称賛し、次のように言う。

「追惟先帝勤人之德、底績遠圖、復禹弘業、聖跡滂流、至于海表(追ひて先帝の人に勤むるの徳を惟<sup>おも</sup>ふに、績を遠圖に底し、禹の弘業を復し、聖跡滂流し、海表に至る)」。章懷太子注「遠圖猶長筭也。言能復禹爲理水之大功(遠圖 猶ほ長筭<sup>ちよんさん</sup>のごとし。能く禹の理水の大功を爲すを復するを言ふなり)。(16)

注は「遠圖」が「長筭」と同じ意味であり、本文の右の一節は明帝が禹の治水の如き偉大な功績を再び挙げたことを言

うと解説する。「遠圖」とはありふれた語句であり、劍岳がここでこの語を使った際に『後漢書』を想起していたかどうかは不明であるが、禹と関わる典故であるため挙げておく。

第十二句の「洗刷」は洗うこと。「區區」は、「情などが細やかである」、あるいは「心や視野が狭い」、という正負両面の意味を持つ（17）。ここでは文脈から考えて後者を意味するのである。この二句では鳴門海峡に橋を架けて鉄道を通し、本州の人々との往来が盛んになることによって、四国の人々の視野を広げようという「遠圖」を具体的に詠う。これは其一で言及されなかったことである。

第十四句の「颺車」とは、中国古典詩において仙人が乗り、風を御し、雲に乗る車を言うが、ここでは汽車を指す（18）。第十八句の「女媧」は伝説上の女神。天地が崩壊したときに彼女が五色の石で天柱を修復したことによって、初めて人々が安心して生活を送ることができるようになったと言われる（19）。この点も前掲の禹と共通する。

以上の語釈を踏まえた日本語訳を以下に示す。「大量の海水が万里のななたから阿波と淡路との間に集まって来て束ねられ、その両脇には山々が門のようにそびえる。その間を怒り

狂ったかのような波濤が渦を作りながら流れる様子は、あたかも疾走する馬のようである。そしてそれから生じる波しぶきが広々とした天に直に接しようとするくらい上がる。このように鳴門海峡の景観が際立って優れたことを、地方の名士と言われる者たちに軽々しく言わないでもらいたい。阿波と淡路の間のこの海峡に橋を架け発電する工事を起すことは、物資の利を図るためだけではない。このことは世を治める人物と共に議論すべきであり、俗人の批判などに関わっておれようか。私の偉大な計画というのは、この海峡に橋を架けることによって、鉄道を橋に通し、狭い世界に居る四国の人々の魂を洗濯することなのだ。また、潮流で発電することによって億万の力を得、電車を一瞬で往来させることができよう。当世の優れた人物はまだ表舞台から降りていない。国を富ませる大計には非凡な見識が必要だ。いつの日か長い海峡のそばで工事が完成すれば、禹王と女媧とを招待したいものだ。鳴門海峡の渦潮を見物するのは中秋節が良いが、その夜の鳴門の月はいかがなものだろうか」。

冒頭四句では別稿一で紹介した鳴門漢詩に見られる典型的な描写が見られる。第五句から第十四句までは鳴門海峡に架

橋し、發電を行うことが実現した場合の利益や状況を具体的に述べる。この部分の中では「地方人士勿輕議」(第五句)、「何關俗客弄評言」(第十句)のように、「地方人士」「俗客」を侮蔑し、彼らにこの計画への批評を控えるよう命じる言葉が見られ、更にはその裏返しとして「經世人物共可論」と述べ、世を治める人物とこの計画について共に語り合いたいという希望を述べる。このことは次の第十五・十六句「當年俊傑未降山、富國大計須達識」に繋がっている。この二句において、劍岳はこの計画が「富國大計」であるととし、それを思いつき、理解するには「達識」が必要であると述べ、その実現を「當年俊傑」に託そうとする。この「當年俊傑」と「經世人物」とが同一人物である必要は無いが、同じく彼の計画に理解を示してくれる同志を指すであろう。そして次の二句においてその計画が完成した暁には中華世界を整備した「禹王」と「女媧」を招待しようと言う。末二句では渦潮の見物には中秋節の頃が良いと言い、完成の時はどうであろうか、と詠って作品を締めくくる。

其一と比べて、この其二では鳴門海峡と季節の風景の描写が増え、鳴門海峡架橋と水力発電の利をより詳しく詠う点が

注目される。更にこの作品では「地方人士」「俗客」への輕蔑の語も増え、その裏返しとして「經世人物」「當年俊傑」への期待も増している。また、「禹王」への言及がここにも見られるが、其一では計画実現の策を尋ねる対象であったのに対して、この其二では計画が成功したときに招待する対象が変わっている。そして、そこには彼だけでなく、女媧も招待するという。伝説上の人物を登場させるのは其一と同じであるが、この作品では話がより進んで、完成時にも言及している点も特徴的である。

これまで指摘してきたように、其一と其二の各作品で鳴門海峡の景色を描写する点は、他の鳴門漢詩と同じである。但し、注意すべき点がある。他の作品の多くは豪壮な景色自体やそれに圧倒された語り手の反応を詠う。劍岳のこの二首では、海峡自体が新たな恩恵を四国にもたらす可能性を秘めると同時に、その景色の豪壮さが彼の計画の最大の障壁ともなっている。特に其二では典型的な鳴門海峡の描写が冒頭に見られるが、そこに描かれる景色は語り手にとって多重の意味を持ち、大きなジレンマとなっているのである。

## (三)「鳴門峽二首」の問題点

「鳴門峽二首」はそれぞれ右に分析してきたような作品であるが、これらの作品について以下のような問題がある。

## ① 作品制作の動機について

中川劍岳の「鳴門峽二首」は『鳴門市史・別巻』の「漢詩」の部に収録されており、この書が比較的普及している。そして、この作品に言及した書物として、児島光一『大鳴門橋と中川虎之助』(教育出版センター、一九八五)を挙げることができる。同書は五十四頁から五十五頁にかけて次のように述べる。「鳴門架橋の夢破れた彼は、失意を次のように漢詩に託した。…(『鳴門峽二首』其一を引用)…悲憤慷慨する先覚者の姿がしのばれて痛ましい」。つまり、児島氏は、劍岳が鳴門海峡架橋およびこの地における発電のための調査を国会で提案したものの否定され、そのことに対する憤懣を其一に表現したと述べている。『年譜』序によれば、このとき、劍岳は人々から「奇ト呼バレ狂ト稱セラ」れたという。その際の本人の

憤激は想像に余りあるが、実際、二首それぞれの作品において、作者(ここでは作品の語り手を作者に重ね合わせてよいであろう)の提案が世に受け入れられないことを詠っていることは確かである。そしてそのような自身の状況を悲嘆し、自身の提案を受け入れない世を俗世と見なし、それらに対する侮蔑を隠そうともしない。劍岳の経歴とこの二首の内容自体を照らし合わせれば、児島氏の記述のようにこの作品を捉えることも故無き事ではない。しかし、後述するように、諸々の状況はこの作品に対する右のような理解が事実在即したものではないことを示している。

## ② 中国古典詩史と日本漢詩史における「鳴門峽二首」の位置

「鳴門峽二首」それぞれの作品に見える幾つかの語義と作品の日本語訳、そしてそれらに基づく分析は前述の通りである。それでは、この作品は中国古典詩や日本漢詩と比較して、どのような特徴を抽出できるであろうか。更に言えば、中国古典詩史と日本漢詩史において、この作品はどのように位置

づけられるであろうか。これらのことを改めて問うことよって、中央で活躍した大詩人ではなく、明治大正期の日本の地方在住の人々の漢詩の水準と漢詩観、そして当時の漢詩という文学ジャンルの在り方の一端を明らかにできよう。

本稿はこれから右の二点について論じていくこととする。

〔第二章〕 作品制作の動機の再検討―「鳴門峽二首」と建議との事実関係の整理

(一) 「鳴門峽二首」其一と『隨鷗集』『鳴門案内者』

本章では、まず第一点目の問題について検討する。

児島氏の著作は、劍岳が衆議院議員として、帝国議会に鳴門海峽における架橋と発電のための調査に関する建議書を提出したものの、否決された後に「鳴門峽」其一を制作し、その憤懣を表現したとしている。

これらの経過について、ここで事実確認を改めて行う。『年譜』によれば、劍岳が二期目の代議士に当選したのが明治四十一(一九〇八)年で、それから度々彼は帝国議会に様々な提案を行っている。大正二(一九一三)年十月二十一日には

大山村の村會議員に当選し、更に同月二十五日の項目には次のような記述が見える。

坂東町公會堂板野郡有志會席上「所得稅營業稅調查機關團體設置」「北麓用水」「美馬郡脇町ニ至ル輕便鐵道敷設」「鳴門架橋發電基本調査」「撫養港改良工事」等ノ諸問題提出討議ス。(一)は引用者)

この記述によれば、劍岳は地元に近い坂東町公會堂で行われた有志の会において鳴門海峽架橋と発電の計画を披露していたことが分かる。また、それら以外の議題として「美馬郡脇町ニ至ル輕便鐵道敷設」も挙げられているが、鐵道敷設のアイデアが「鳴門峽」其二に詠われていたことは前に指摘した通りである。『年譜』においてここで初めて鳴門海峽の架橋と発電のアイデアに関する言及が見えるが、この時の「有志」の反応は記録されていない。

そして、劍岳が実際に第三十一回帝国議会の予算委員会に「鳴門架橋及び潮流利用發電調査ニ關スル建議案」を提出したものの、それが否決されたのは、大正三(一九一四)年で

ある(20)。ここまでは『年譜』の記す事実である。

ところが、「鳴門峽二首」其一の初出は、大正二年十二月に刊行された漢詩雑誌『隨鷗集』の第一百編であり、そこで其一是「鳴門峽」とだけ題されている。つまり、帝国議会への建議書提出およびその否決の前年に既に其一是公表されていたのである(21)。

この其一が掲載された漢詩雑誌『隨鷗集』とは、隨鷗吟社が発行した月刊誌である。明治期の漢詩の主な発表の場は新聞や雑誌という当時としては新たなメディアであり、中でも漢詩文の雑誌は雨後の筍の如く創刊され、漢詩文の制作が隆盛した(22)。明治後期から大正期にかけて、漢詩は斜陽期を迎えようとしていたが、その趨勢に在ってもなお活動を活発に行っていた詩社の一つが隨鷗吟社であり、その社員たちの作品発表と活動報告のメディアが『隨鷗集』であった(23)。この雑誌は明治三十七(一九〇四)年に創刊されたが、当初の主幹は大久保湘南であった。湘南は慶應元(一八六五)年に生まれ、明治四十一(一九〇八)年に没した漢詩人である。彼は佐渡の人で、役人や学校講師を経て「北海新聞」「函館日日新聞」の主筆となったが、明治三十七年に上京して隨鷗吟

社を設立し、以後は漢詩人として活躍した。漢詩は大江敬香と森槐南に学んだ(以上は三浦叶『明治漢文學史』八四頁による)。大久保湘南以外にこの雑誌に関わった人物として、森槐南・国分青厓・永坂石埭・本田種竹ら当時の大詩人だけでなく、三島中洲・宮内大臣田中光顕(青山)ら皇室と縁の深い人物や、榎本武揚(梁川)・西園寺公望(陶庵)・伊藤博文(春畝)・副島種臣(蒼海)ら政治家、渋沢栄一(青淵)ら実業家も挙げることができる(24)。『隨鷗集』掲載の作品には花鳥風月を詠った作品や贈答・唱和等の作品が多いが、時折、政治や海外情勢等の時事を詠うものも見られる。この点から言えば、劍岳の作品がこの雑誌に掲載されたことも異とするに足りない。

また、第一百編の四十九頁に「社員出入」という会員動向の記録のページがあるが、この「入社・正社員」の欄に「劍岳 中川虎之助君 徳島縣板野郡大山村 主幹紹介」と記されている。当時の『隨鷗集』の主幹は土居香国(一八五〇—一九二一)であり、右の記述によれば、劍岳の入社はその紹介によるものであったという。香国は土佐の生まれの政治家・漢詩人であるが、興味深いのは、其一に付された香国の次の



評語である。

香國曰、聞劍岳君、於鳴門海峽、有架橋發電計畫。予曾官徳島、亦言架橋事、時人以爲迂遠。今誦此篇、於卅餘年後、喜得同志、況發電哉（香國曰く、聞く 劍岳君、鳴門海峽に於いて、架橋發電の計畫有り。予 曾て徳島に官たり、亦た架橋の事を言ふも、時人 おもへ 以爲らく迂遠と。今 此の篇を誦し、卅餘年の後に於て、同志を得たるを喜ぶ、況んや發電をやと）。

土居香國は次のように評する。聞く所によると、中川劍岳君は鳴門海峽に橋を架け、發電を行う構想をお持ちだという。私はかつて徳島で役人をしていたとき、鳴門海峽に橋を架けることを提案したが、当時の人々から「そんなことをしても役に立たない」と言われたものだ。今に至って中川君のこの作品を拝見し、あれから三十年余りの後で同志を得たのは喜ばしいことだ。その上、中川君は發電の計画もお持ちということ、尚更私は嬉しく思う。

其一に対する右の香國の評語によれば、かつて彼自身も鳴

門海峽架橋の構想を提案したことがあったが（25）、当時の人々からは否定的な意見が寄せられた。しかし、三十年後、同様の構想を詠った劍岳の漢詩を読み、「同志を得たるを喜んだ」という。このことと前掲の「社員出入」によれば、劍岳は当時の随鷗吟社の主幹であった土居香國に其一を贈り、随鷗吟社への入社と同時にこの作品の『随鷗集』第百十編への投稿を依頼した、と考えられる。そしてこれは、前述の如く、近い将来、帝國議會に提案するためにアイデアを世の人々に広く知らしめるためであったのであろう。香國がかつて鳴門海峽架橋の構想を抱いていたことを劍岳が知っていたのかどうかは不明である。少なくとも大正二年十月の時点で劍岳は鳴門海峽架橋のアイデアを持っており、坂東町公会堂で開かれた有志の会でそれを披露した。『年譜』等はその結果は記されていないが、あまり芳しい反応は得られなかったかもしれない。其一の第三句「大聲難入俚人耳」はその時の反応を、『莊子』の典故を用いて揶揄した可能性もある。

いずれにせよ、本節でこれまで述べてきた事実に拠れば、其一大正三年に帝國議會において建議書が否決された憤懣を作者が詠ったものではなく、その前年十月の地元で開かれ

た「有志會」の後、自身の考えを更に多くの人々に紹介するため、『隨鷗集』第百十編に発表したと考えられる。劍岳は案の実現に向けて、多方面で周到に準備を進めたのである。

そして彼は翌年の帝国議會に建議書を提出したが、それが否決されたのは前述の通りである。それから八年後の大正十一年刊行の鳴門保勝會『攝政宮殿下献上 鳴門案内者』二六頁に、其一は「帝國議會提案問題舊作 爲篠原雅兄」と題して収録されている。この小冊子は徳島に行幸した当時の摂政、つまり後の昭和天皇に献上された鳴門のガイドブックである（別稿二参照）。この冊子には鳴門を題材とした漢詩文が収録されており、その中に劍岳の「鳴門峽二首」其一も右の題名で収録されている。「篠原雅兄」が誰を指すのかは不明（26）。どのような経緯でこの作品が選ばれたのかも不明であるが、其一の再録に当たって劍岳がこの詩の題名を「帝國議會提案問題舊作」に改めたのは、時の摂政やその他の読者の目に触れ、事態の打開に繋がることを期待してのことであろう。

（二）『海南風雅』への「鳴門峽二首」投稿

其二については、「鳴門吟」と題された大正十年三月の日付を持つこの作品の原稿が前掲「中川家文書」の中に含まれているため、その制作は遅くともこの月ということになる。八年前に制作された其一では自負が強く見られたのに対して、其二では「當年俊傑」や「經世人物」という語り手以外の優れた人物に提案の実現を託す表現が複数個所認められる。これは提案が帝国議會で否決された後に其二が制作されたことに起因するであろう。否決により、劍岳は自身の力で事態を動かすことの難しさを悟り、他の者に託そうとしたと考えられる。

このことと関連して注目されるのは、劍岳が明治三十五（一九〇二）年に台湾総督児玉源太郎（一八五二—一九〇六）宛に提出した、糖税に関わる提案書の中の次のような一節である。

夫レ國家ノ大計ヲ畫シ、經世安民ノ大業ヲ建設スルハ、時務ヲ識ル俊傑ノ任ナリ。俊傑ノ士相遇ヒ、其ノ意見投合シテ滿腔ノ熱誠ヲ發揮シ、相提ケテ國家ノ經綸ニ從フ。是ニ於テカ國家ノ危急以テ救済スベキナリ、社會ノ進運

以テ庶幾スベキナリ。近ク我方國ノ維新ノ大業ヲ回顧スルニ、西郷南洲、勝海舟、其ノ他俊傑ノ士意氣投合シ、明籌偉策ハ、百難ヲ戡定セシ結果ニ外ナラズ。故ニ俊傑ハ能ク國家ヲ經營シ、國家ハ亦タ俊傑ノ經營ヲ待テリ。

『年譜』明治三十五年の項目。句読点と一部の助詞は引用者が補った。

右の短い引用の中でも「俊傑」という語が五回見られる。

ここでの「俊傑」が、第一に台湾統治において絶大な権力を有した児玉を指すこととは言うまでもないことであろう。右の一節の主旨は冒頭の一文「夫レ國家ノ大計ヲ畫シ、經世安民ノ大業ヲ建設スルハ、時務ヲ識ル俊傑ノ任ナリ」に尽きる。

これは国会議員の立場では当然の考えと言えるが、彼の政治に対する姿勢を述べた一節として注目される。但し、「俊傑」は複数存在し、「相遇と、其ノ意見投合」することが理想とされているため、提案者である劍岳自身も「俊傑」の一人ということになるであろう。実際に彼はこの一節の後に具体的な提案を述べ、児玉に実行を依頼する。

そして、右の引用部冒頭の一文とほぼ同じ内容が「鳴門峽

二首」其二の第九・十句と第十五・十六句でも詠われている。児玉への提案書は散文であったが、鳴門海峽の架橋と発電の提案の否決の後、劍岳はこの詩で更に多くの人々へ自身の構想を訴え、「共に論ず可き」「俊傑」「經世人物」と「意氣投合」する希望を詠ったのであった。

そして、この作品は大正十一年に刊行された三谷象雲編『海南風雅』に収録されるのだが、劍岳はここで初めてこの作品と其一とを併せて「鳴門峽二首」という連作とした。

象雲の『海南風雅』跋文は次のように言う。

我海南之地、古來名流輩出、雅音振興、而時世變遷、繼述者漸希矣。知友某等、深慨之、勸予蒐集四國今代之詩。於是與橫山黃木、宮脇鯉溪、猪口莘里諸君謀、飛檄四方、求寄稿。獲百十家、古今體三百五十八首、編次上梓、乃爲此冊。珠玉燦爛、光彩眩目。庶幾足以追前修芳躅、是爲跋。大正十一年壬戌仲春（我が海南の地、古來、名流輩出し、雅音、振興するも、時世、變遷し、繼述する者漸く希れなり。知友某等、深く之を慨き、予に四國今代の詩を蒐集することを勸む。是に於て横山黃木、宮脇鯉

溪、猪口莘里諸君と謀り、檄を四方に飛ばし、寄稿を求む。百十家古今體三百五十八首を獲、次を編みて上梓し、乃ち此の冊を爲る。珠玉 燦爛として、光彩 目を眩ます。以て前修の芳躅はうたくを追ふに足るを庶幾こいねがひ、是れ跋つを爲るなり。大正十一年壬戌仲春)

以下に日本語訳を示す。「私の故郷である海南の地方では、古来有名な漢詩人を輩出し、彼らの薫り高い作品は天下の人々に知れ渡った。しかし、時代は移り変わり、彼らの詩業を継承して漢詩を制作する者は次第に少なくなってきた。私の知友はこのことに切齒扼腕し、私に四国の当代の詩を収集することを勧めた。そこで横山黄木、宮脇鯉溪、猪口莘里諸君と相談し、四国各地に檄を飛ばし、詩を募った。そうしたところ、百十名の詩人の古今体の詩三百五十八首が集まり、それらの作品を配列し、それらを版木に彫って、この冊子を作製したのである。収録作品は全て珠玉の如く輝き、その光はまばゆいばかりである。本書が先人の偉大な業績を追うに足るものであることを祈り、この跋文を認める次第である。大正十一年壬戌仲春」。この跋文によれば、象雲は四国の漢詩

人たちに広く「寄稿を求」め、百十名から「古今體三百五十八首」が寄せられたという。この中に劍岳の「鳴門峽二首」も含まれていた。つまり、彼の方から鳴門海峡の架橋と発電を詠った別々の作品を二首の連作としてまとめ、他の三題五首とともに投稿したのである(27)。

『海南風雅』の巻頭には讃岐出身の漢詩人であった牧野藻洲(謙次郎、一八六三—一九三七)の序文が掲載されているが、その末尾に「象雲此舉、不唯裨資區區藝林也。爲國家者、又可以覽閱而施于有政也夫(象雲の此の舉、唯だ區區たる藝林に裨資するのみにあらざるなり。國家を爲むる者、又た以て覽閱し有政に施すべきかな)」、三谷象雲氏のこの事業は、ただ漢詩文という狭い世界にのみ貢献するものではなく、政治家の閲覽にも供し、政治に役立ててもらおうべきものでもあるという(28)。当然のことながらこの言は劍岳の作品だけを指すものではないであろう。しかし、劍岳は其一と新作の其二を併せて「鳴門峽二首」として『海南風雅』にも投稿し、人々に広く計画を伝えようとしたことが窺われる。

劍岳がいつ頃から鳴門海峡の架橋と発電のアイデアを考えていたのかは不明である。いずれにせよ、以上のように、大

正三年に帝国議会議に建議書を提出する前の年に、彼は有力な漢詩雑誌に既に其一を発表していた。このことは、自身の提案を事前に広く人々に知らしめるためであったと考えられる。

しかし、その提案は帝国議会で正式に否決された。そして、大正十一年において、彼は其一と新たに制作した其二を「鳴門峽二首」としてまとめて発表し、ここに至ってこれらの作品はまさしく作者の「悲憤慷慨」を詠い、同志を求めた作品となったのである。複数の書物に作品を掲載するべく手配しているのは、単に自身の心情を訴えるだけでなく、まだ計画の実現を諦めていなかったためであったとも考えられる。

### 〈第三章〉中国古典詩史における「鳴門峽二首」

本章以降では、問題の第二点について考察していきたい。まず本章では、中国古典詩の観点から劍岳のこの作品を捉え直すことを試みる。

「鳴門峽二首」それぞれの制作時期は離れているものの、最終的には連作としてまとめられたが、海峽の描写の他に共通点が幾つかある。第一点は架橋と電力の利益の直接的な表

現、第二点は「禹王」「女媧」という伝説上の神への言及、第三点は自身の計画を理解しない俗人への侮蔑とそれと裏返しの孤独である。本章ではこれらの特徴を中国古典詩と比較することによって、この作品を敢えて中国古典詩史に位置付けたい。

### (一) 政治・経済を論じる中国古典詩

本節では「鳴門峽二首」の共通点であり、最大の特徴である第一点について述べよう。

日本文学と比較すれば、中国において文学は政治や社会と双方向的な影響関係を持つと規定され、実作品に政治性や社会性が強く表れがちであることは、多くの先行研究が指摘してきた(29)。但し、詩歌に限って言えば、政治や社会というテーマを詠うにせよ、実際の作品は抽象的であるか、あるいは具体的・描写的であっても物語風の諷刺という形をとるものが多く、建設的で具体的な提案・建言を詠うものは比較的小さい。このことは唐代の杜甫の「三吏三別」や「兵車行」、白居易の「新樂府」「秦中吟」などの「諷諭詩」を読めば直ち

に了解されることである。これらの作品は、苦しむ庶民や兵士の姿を物語風にヴィヴィッドに詠い、時の政治や社会の風潮を暗に批判する。これらのような作品とその理念および技法は、漢魏時代の詩歌のそれを継承発展させたものであった(30)。

そもそも身分によっては朝廷の政策に物申すこと自体が越権行為であり、具体的な建策が可能であっても、それは口頭や上奏文等の散文の中で述べられるのが常で、アイデアや過去の体験にしても詩に具体的に詠われることは比較的少ない(31)。中国であれば筆禍事件ほどの時代でもあり得ることであつたが、身分に関わらず時の政治に対して意見を申し述べる場合、直言しないことが処世の知恵であり、文学においても、『毛詩』大序たいじよ以来の伝統であつた。

この『毛詩』大序は、「詩」の理念を述べ、後の中国文学思想の綱領となつた文章だが、その一節に次のように言う。

「上以風化下，下以風刺上，主文而諷諫。言之者無罪，聞之者足以戒，故曰風（上は以て下を風化し、下は以て上を風刺し、文を主として諷諫す。之を言ふ者は罪無く、

之を聞く者は以て戒むるに足る、故に風と曰ふ）」

鄭箋ていけん「風化、風刺，皆謂譬喻不斥言也。…諷諫，詠歌依違不直諫（風化、風刺，皆な譬喻もて斥言せざるを謂ふなり。…諷諫，詠歌して依違して直諫せず）」

(32)

「為政者は詩で人々を教化し、人々は詩で為政者を諷刺する。音楽に乗せて婉曲に諫めるので、言う者に罪は無く、聞く者は戒めとするに充分である。従つて、「風」というのである」。本文中の「風化」「風刺」という語について、鄭玄ていげんの箋は、「譬喩で直言しないことを言う」と解説する。また、本文の「諷諫」についても、鄭箋は「詩歌に詠じて多様な解釈を可能とする作品にし、直言して諫めない」ことだという。右の一節は直接的には『詩経』に収録されている作品に対する総括であるが、婉曲な表現で意見を直言せず、多様な解釈を可能とした作品とすることにより、政治や社会に対する意見を述べるにしても、それは間接的なものになる。そのことによって、「之を言ふ者」は罰せられることがなく、「之を聞く者」はその作品を戒めとすることができる。以上のように、

中国古典詩において政治や社会に対する作者が意見を述べる際には、直接的な建言や提案は述べず、修正すべき状況を描写したり、譬喩を用いたりすることによって、読者としての政治家が為すべきことを悟り、行動に移すことを期待したのであった。

但し、中国古典詩の中には、政策を具体的に詠う作品も存在した。まずは唐・杜甫（七一―七七〇）の二首の一部を挙げる。

・「北征」陰風西北來，慘澹隨回紇。其王願助順，其俗善馳突。送兵五千人，驅馬一萬匹。此輩少爲貴，四方服勇決。所用皆鷹騰，破敵過箭疾。聖心頗虛佇，時議氣欲奪。伊洛指掌收，西京不足拔。官軍請深入，蓄銳可俱發。此舉開青徐，旋瞻略恒碣（陰風 西北より來たり，慘澹として回紇に隨ふ。其の王 助順を願ひ，其の俗 馳突を善くす。兵五千人を送り，馬一萬匹を驅る。此の輩 少なきを貴と爲す，四方 勇決に服す。用ふる所は皆な鷹のごとく騰り，敵を破ること箭の疾きに過ぐ。聖心 頗る虚佇し，時議 氣 奪はれんと

欲す。伊洛 掌を指して收めん，西京 抜くに足らざらん。官軍 深く入らんことを請ふ，銳を蓄ひて俱に發すべし。此の舉 青徐を開かん，旋ち恒碣を略するを瞻ん）（『杜詩詳注』四〇二―三頁、卷五）

・「茅屋爲秋風所破歌」安得廣廈千萬間，大庇天下寒士俱歡顏，風雨不動安如山。嗚呼，何時眼前突兀見此屋，吾廬獨破受凍死亦足（安くんぞ得ん 廣廈千萬間，大いに天下の寒士を庇ひて俱に歡顏，風雨にも動かさず安きこと山の如きを。嗚呼，何れの時か眼前に突兀として此の屋を見ん，吾が廬 獨り破れて凍を受け死するも亦た足れり）（『杜詩詳注』八三二―三頁、卷一〇）

前者は至徳二（七五七）載、肅宗の不興を買い、鄜州に疎開していた妻子のもとへ帰省する途次の状況とその間に作者の胸に去來した様々な心情や考えを詠った、全百四十句の大長編詩である。右に引用したのは後半で、当時の安史の乱の経過とそれに基づくアイディアを詠っている。唐王朝は、勇猛果敢で恐れられていた西北の異民族「回紇」の力を頼ろうとしていたが、世論は後難を恐れてそのことに困惑していた。

しかし、杜甫は反乱軍を鎮圧し、賊軍に奪われた都市を奪還できるとして、その案に賛成している。更に洛陽・長安の次に青州（現在の山東省）・徐州（現在の江蘇省）を開放し、その後は敵の根拠地である恒山（現在の山西省）と礪石（現在の河北省）を攻略するという戦略も提案している。このように、この作品では乱の状況を克明に描写し、毒を以て毒を制しようとする唐王朝の策に対して、具体的な理由を述べて賛成の意を表し、自身の案も提示している。

## 大 村 和 人

後者は上元二（七六一）年、成都での作品。八月に強風が吹き、杜甫の住まいの屋根に葺いた茅を吹き飛ばしてしまい、それを近所の子どもたちが持ち去ってしまった。語り手にとつては生活に関わる困難事であったが、彼は天下の貧しい人々を救済するアイデアを詠って作品を締めくくる。そのアイデアとは、山の如く風雨に動じない広大な屋敷に世の貧しい人々を収容できれば、彼らの顔には喜びの表情が満ち満ちるであろう、というものである。状況と対策を具体的に詠っていた前詩に対して、この詩での提案はスケールが大きいが、空想的である。

右の二首は比較的具体的に状況を改善するための方策を詠

う。但し、前者の主題は反乱鎮圧である。後者は一応福祉政策だが、空想的で、どのようにこのような屋敷の落成を実現させるかということとは語られない（33）。

江戸時代後期に至り、日本でも杜甫は盛んに読まれるようになったが（34）、政治や社会の状況に対して比較的積極的かつ具体的に詠う杜甫の詩においても、そこに詠われる対策の具体性は右のような内容に止まっているのである（35）。

その杜甫に私淑していたと公言した後世の詩人の一人が、北宋の王安石（一〇二一—一〇八六）である。彼の五言古詩「發廩（廩を發く）<sup>く</sup>」は、全編に亘って政治を述べる。作品を見よう。

- |   |        |                     |                          |
|---|--------|---------------------|--------------------------|
| 1 | 先王有經制， | 先王                  | 經制有り，                    |
| 2 | 頒賚上所行。 | 頒賚 <sup>はんざい</sup>  | 上 <sup>じやう</sup> の行ふ所なり。 |
| 3 | 後世不復古， | 後世                  | 古に復せず，                   |
| 4 | 貧窮主兼併。 | 貧窮                  | 兼併を主とす。                  |
| 5 | 非民獨如此， | 民の獨り                | 此くの如くなるのみに非ず，            |
| 6 | 爲國頼以成。 | 國を爲 <sup>な</sup> むる | こと頼 <sup>よ</sup> りて以て成る。 |
| 7 | 築臺尊寡婦， | 臺を築きて               | 寡婦を尊び，                   |



- 8 入粟至公卿。 粟を入れれば公卿に至る。
- 9 我嘗不忍此， 我れ 嘗に此れを忍びず，
- 10 願見井地平。 井地の平らかなるを見るを願ふ。
- 11 大意苦未就， 大意 未だ就らざるを苦しみ，
- 12 小官苟營營。 小官 苟くも營營たり。
- 13 三年佐荒州， 三年 荒州を佐け，
- 14 市有棄餓嬰。 市に棄餓の嬰有り。
- 15 駕言發富藏， 駕して言に富藏を發き，
- 16 云以救鰥惇。 云ふ 以て鰥惇を救はんと。
- 17 崎嶇山谷間， 崎嶇たり 山谷の間，
- 18 百室無一盈。 百室 一に盈つる無し。
- 19 鄉豪已云然， 鄉豪 已に云に然り，
- 20 罷弱安可生。 罷弱 安くんぞ生くべけんや。
- 21 茲地昔豐實， 茲の地 昔 豐實にして，
- 22 土沃人良耕。 土 沃え 人 良く耕す。
- 23 他州或皆窳， 他州 或いは皆窳するも，
- 24 貧富不難評。 貧富 評すること難からず。
- 25 爾詩出周公， 爾詩 周公に出づ，
- 26 根本詎宜輕。 根本 詎ぞ宜しく輕んずべき。

27 願書七月篇， 願はくは七月篇を書し，

28 一寤上聰明。 一たび上の聰明を寤まさんことを。

(36)

「築臺尊寡婦」は、秦の時代、寡婦である清という女性が辰砂（絵具や薬の原料となる）の出る縦坑を独占して管理していたが、始皇帝は彼女のために女懷清台を築いたことに由来する（『史記』卷二一九「貨殖列伝」）。「入粟至公卿」は、ト式（『漢書』卷五八「公孫弘ト式兒寛傳」）、黃霸（『史記』卷九六「張丞相列傳」）のこと。いずれも金銭や穀物を上納して官位を授けられた者である。「鰥惇」の「鰥」は妻の無い男性、「惇」は兄弟の無い者。「爾詩」は『詩經』豳風「七月」を指す。作品の主題について、小序は「陳王業也。周公遭變。故陳后稷先公風化之所由，致王業之艱難也（王業を陳するなり。周公 變に遭ふ。故に后稷先公の風化の由る所，王業を致すの艱難を陳するなり）」、「七月」は王の政治を述べたものであり、周公旦は変事に遭遇したので、后稷等の周の先君の教化の由来と王の政治を行うことの難しさを挙げたのである、と解説する。作品自体は長編で、一年の農事を述べたもので

ある。これが小序にいう「王業」である。

以上の語釈を踏まえた日本語訳を以下に示す。「古の王には決まった制度があった。それは、物を人々に分け与えるのを王の責務としたことだ。その古の制度が後世に復活することではなく、貧しい者は土地を併合した地主に仕えることになった。民衆のみがそうであるのでなく、国の政治も地主に頼って成し遂げられていくようになった。大金持ちの未亡人を尊重してたかどのを築き、穀物を上納すれば高級官吏に就くことができるようにした。私はこのようなことを見過ごすことができず、井田の公平な制度の復活を願った。大望が成就しないことに悩みながらも、役人としての役目を懸命に果たした。三年間、荒れ果てたこの舒州の知事の補佐を務めているが、かつて市場に腹を空かせた赤子が捨てられていた。そこで私は出かけて行って富豪の蔵を開かせたが、彼らには独り者やみなしごを救うためだと説明した。ここは険しい山間の土地であるが、百軒の中で一軒も蓄えのある家は無い。地域の富豪でさえこのような有様であり、疲弊した民衆はどのようにして生活していくことができようか。しかし、この地も昔は豊かな土地で、土は肥え、人々は農耕に励んだ。他の州

の中には、あるいは当地の民衆の怠惰に因るためか、本州との貧富の差を判定することが容易な州もあった（本州の方が富んでいた）。『詩經』の豳風の詩は周公旦の手によるものと言う。そこに収録されている「七月」の作品が称揚している、国の根本的な産業である農業を軽んじて良いわけがない。その「七月」の詩を書き記し、一度お上の賢明さと呼び覚まして差し上げたいものだ」。

清水茂氏はこれが皇祐五（一〇五三）年、安石が舒州の通判を務めていた三十三歳の時の作品であるとしている（37）。この作品の第八句までは、古には君王が人々に物資を分け与えていたにも関わらず、後世においては「兼併」、つまり地方の地主がその役目を担うようになり、それによって地主たちが増長していったことを批判する。第九句から第二十四句までは、舒州における作者の政治とその結果を具体的に描写する。作品によれば、盛り場に赤子が捨てられているのを語り手は見て、金持ちの蔵を開き、「鰥寡」、つまり赤子を含む身寄りの無い独り者の人々を救おうとしたという。そして末尾の部分において『詩經』収録作品中屈指の農業詩である「七月」を持ち出して農業の重要性を主張し、「七月」を書写して

皇帝に送り、政策に活かすことを望むと詠い納める。

王安石の政治改革、所謂「新法」の目的の一つが「兼併」による政治の弊害の改善であったことは、宋代政治経済史や王安石の事績を説く書物が必ず指摘する（38）。右の作品は王安石の若い頃の作品と考えられており、後の政治改革を直接予告したものではないが、比較的具体的に赴任地の状況をつぶさに描き、対策を詠った作品として注目される。また、これは「五經」の一つである『周禮』を尊重する王安石の政治思想とも関わるが、古の政治を模範としている点も見逃せない（39）。このように、王安石のこの作品は全編に亘って政治の理想と現実、そして自身の実績を詠う。この作品は状況や体験の描写と自身の思想を直接的に詠い、象徴的表現や比喩も無い。

それでは、王安石のこのような詩はどのように評価されてきたか。彼の文学活動の経歴について言えば、前半生と後半生、特に政界引退後の二つの時期に分けられることが多い。「發廩」は前半生の作に分類される。この時期の彼の詩について、北宋末から南宋初期にかけて活躍した葉夢得（一〇七七—一一四八）は、『石林詩話』巻中で「王荊公少以意氣自許、

故詩語惟其所向、不復更爲涵蓄（王荊公少くして意氣を以て自ら許す、故に詩語惟だ其の向かふ所のみにして、復た更に涵蓄を爲さず）」（40）、王安石は若い頃に意思の強いことを自任していたため、彼の詩歌における言葉遣いは意の赴くままで、それ以上の含蓄というものはや無かった、という。彼は王安石の晩年の詩歌は絶賛しているが（41）、若き頃の作品については「含蓄が無い」と言い、手厳しい。

しかし、これは彼独自の評というわけではない。北宋・梅堯臣の「含不盡之意、見於言外（盡きざる意を含み、言外に見はす）」や南宋・嚴羽の「言有盡而意無窮（言盡くること有るも意窮まること無し）」ということばが後世にも支持されたように（42）、語り手の心情または考えを直叙するのではない、婉曲で含蓄のある表現が、どちらかと言えば中国文学批評において評価されてきた（43）。

前掲のように杜甫も政治や軍事に対するアイデアを比較的具体的に詠うことはあったが、それは作品の一部で、それ以外の要素が高く評価されてきたことは言うまでもない（44）。そして、杜甫が評価されてきた要素の一つを挙げれば、それは彼の作品に見られる婉曲で含蓄のある表現である。

前掲の嚴羽は『滄浪詩話』「詩辨」で次のように言う。

詩之品有九、曰高、曰古、曰深、曰遠、曰長、曰雄渾、曰飄逸、曰悲壯、曰淒婉。其用工有三、曰起結、曰句法、曰字眼。其大概有二、曰優游不迫、曰沉着痛快。詩之極致有曰入神。詩而入神、至矣、盡矣、蔑以加矣。惟李杜得之。他人得之蓋寡也（詩の品に九有り、曰く高、曰く古、曰く深、曰く遠、曰く長、曰く雄渾、曰く悲壯、曰く淒婉と。其の用工に三有り、曰く起結、曰く句法、曰く字眼と。其の大概に二有り、曰く優游不迫、曰く沉着痛快と。詩の極致に一有り、曰く入神と。詩にして神に入れば、至れり、盡くせり、以て加ふる蔑し。惟だ李「白」杜「甫」のみ之を得たり。他人之を得ること蓋し寡し。〔滄浪詩話校釋〕七一八頁「詩辨」）

ここでは詩の九種の品格（「品」）、三種の技術（「用工」）、二種の詩風（「大概」）、そして最高の境地を一点挙げる。その上で、これらを全て兼ね備えた詩人として李白と杜甫を挙げた。この中で、九品の「長」が余韻や含蓄の豊かさを言う（45）。

それ以外の「品」もそれと関わりはあるであろう。このように、「言 盡くること有るも 意 窮まること無」き作品を評価し、九種の「品」を作品に求める嚴羽が、中国古典詩史上、至高の詩人と評価する詩人の一人が杜甫なのである。

その詩風と比べれば、若き日の王安石の前掲作品は詩的表現に乏しく、自身の体験や考えを直叙しており、「言 盡くること有りて 意 窮まる」ものということになる。王安石に対するこのような評価は、現代に至っても同様である。右のような文学思想を継承し、「發廩」のような王安石の前半生の政治詩の評価も総じて高くはない（46）。

話がやや先走ったが、清末に西欧から新たな事物が続々と伝わり、西欧の人々も清国を訪れ、逆に清国の人々も海外に赴くことが増えたことよって、それらの見聞や西欧の事物を詩歌に詠おうとする動きが見られた。このような動きは「詩界革命」とも言われ、代表的な詩人として黃遵憲（一八四八—一九〇五）を挙げることができる（47）。但し、「革命」とは言ってもこれはあくまで古典詩の枠内におけるそれであって、口語体の詩歌については胡適らを待たねばならない。彼らの作品の中から具体的な建言を行う詩歌は簡単には見いだ

せない。

ここに至れば中川劍岳の知る所であつたかどうかは不明であるが、少なくとも中国の伝統的な文学批評の基準に基づいて言えば、鳴門海峡の架橋と発電を直接的に詠う彼の「鳴門峽二首」も含蓄に乏しい、ということになるろう。

(二)「不平の文学」の手法の継承

しかし、その一方で、劍岳の作品は中国古典詩の伝統の本来をも継承している。このことは先に指摘した二首の共通点の第二・三点と関わる。本節ではこれらの二点についてまとめて論じよう。

この二首が「禹王」や「女媧」に言及したのは、初歩的に言えば、この二人が中華の大地を整備・補修したと述べる伝説の記録が残されているからである。しかし、厳密に言えば、禹は治水において、女媧は天柱を補修したことににおいて有名であり、両者ともに橋を架けたことで知られるのではない。

架橋と言えば、杜甫の祖先である、西晋の杜預が想起される。彼が険阻な富平津に橋を架けた故事は『晉書』の本伝に

記され(48)、同じエピソードは『蒙求』にも「杜預建橋」と

題して収録され、日本人にも知られていた。『蒙求』とは、唐の李瀚が古代から六朝時代の歴史故事を子どもに記憶させるために編纂した啓蒙書である。後述するように、日本でも手軽に中国の古の故事を学べる教科書として普及した(49)。

杜預に話を戻せば、日本漢詩の中にもこの故事について言及した例がある。例えば、幕末明治期の大詩人・大沼枕山の「歴代詠史百律」第三十三首「杜預」である(50)。このような先例も存在したにも関わらず、なぜ劍岳は杜預ではなく禹や女媧を採用したのであるうか。

この点に関する劍岳自身の説明は残っていないため、本人の真意は不明である。しかし、残された作品に即して言えば、少なくとも次のように考えることはできるであろう。禹や女媧をもってしてもそれぞれの事業は容易ではなかった。古来、險阻で名高い鳴門海峡に橋を架けることは、架橋技術が現代ほど発達していなかった当時としてはほとんど夢物語であつたであろう。劍岳自身もそのアイデアが俗人に理解され難いことは作中で詠っている。実際にこの提案は当時の人々から激しい非難を浴び、否定された。しかし、提案が実現後の四

国の社会や経済を大変革する可能性がある難事業であったからこそ、中華の国土を整備して文明を切り開いた神話上の人物の方が、提案の実現に関わる人物として詩に取り上げるには相応しいであろう。

それだけでなく、この問題は中国古典における「不平の文学」の系譜の中で考える必要もある。語り手自身が高見を有していることを自任しつつも、自身の存在や主張が世間の人々に受け入れられず、自身の主張や孤独および憤懣を作品に託す「不平の文学」は、中国古典文学史において『楚辭』「離騷」に始まり、近代に至るまで綿々と継承されてきたテーマの一つと言っても過言ではない(51)。「離騷」は長編の韻文「辭賦」の祖とされる作品で、『文選』にも収録されている。内容は、誇り高き主人公かつ語り手である「靈均」が現実社会で挫折し、天上世界に同志を求めていく、というものである。自分の理想を理解しない俗人への侮蔑と自身の孤独を詠い、同志を求める劍岳の二首は、「離騷」の系譜に連なるものと位置付けられる。

更に注意されるのは、「離騷」で語り手が自身の正しさを訴える際の手法である。ここで『楚辭』の注釈書『楚辭章句』

の注釈者である後漢の王逸が「離騷」注の序として述べた次の文章を見よう。

離騷經者、屈原之所作也。屈原與楚同姓、仕於懷王、爲三閭大夫。三閭之職、掌王族三姓、曰昭、屈、景。屈原序其譜屬、率其賢良、以厲國士。入則與王圖議政事、決定嫌疑。出則監察羣下、應對諸侯。謀行職脩、王甚珍之。同列大夫上官、靳尚妬害其能、共譖毀之。王乃疏屈原。屈原執履忠貞而被譏毀、憂心煩亂、不知所愬、乃作離騷經。離、別也。騷、愁也。經、徑也。言已放逐離別、中心愁思、猶依道徑、以風諫君也。故上述唐、虞、三后之制、下序桀、紂、羿、澆之敗、冀君覺悟、反於正道而還己也(離騷經は、屈原の作る所なり。屈原 楚と同姓にして、懷王に仕へ、三閭大夫と爲る。三閭の職、王族三姓、曰く昭、屈、景を掌る。屈原 其の譜屬を序し、其の賢良を率ゐ、以て國士を厲はげます。入りては則ち王と政事を圖議し、嫌疑を決定す。出でては則ち羣下を監察し、諸侯に應對す。謀行はれ職脩をまり、王 甚だ之を珍とす。同列の大夫上官、靳尚 其の能を妬害し、共に之を譖毀しんじき

す。王 乃ち屈原を疏んず。屈原 忠貞を執履して讒さん衰せうせられ、憂心煩亂して、慙うらたふる所を知らず、乃ち離騷經を作る。離、別なり。騷、愁なり。經、徑なり。言ふところは已に放逐離別し、中心愁思し、猶ほ道徑に依りて、以て君を風諫するなり。故に上は唐、虞、三后の制を述べ、下は桀、紂、羿、澆の敗を序し、君 覺悟し、正道に反り己を還さんことを冀こいねがふなり。(52)

日本語訳を以下に示す。「離騷經」は屈原が制作したものである。彼は楚の王家と同姓である。彼は楚の懷王に仕え、三閭大夫になった。この職は、王族である昭・屈・景を統括した。彼はそれぞれの家の系譜を述べ、それぞれの一族の賢明な者を率いて楚国の士を励ました。宮廷の中では王と政治を審議し、疑わしきものを決裁し、宮廷の外では多くの家臣たちを監察し、他国に使用しては諸侯たちと交渉した。彼のおかげで計画は実行され、人々の職位は整った。これらのことにより、彼に対する王の信任は篤かった。しかし、彼と同列の上官大夫や斬尚らは屈原の才能を妬み、懷王に讒言した。そのため、王は屈原を疎んじるようになった。屈原は偽りの

告げ口をされ、憂いを抱き、心が乱れたが、その心情を訴えるところが無かった。そこで「離騷」を制作したのである。「離」は別れ、「騷」は憂い、「經」は道である。自身が放逐されて王と離別し、心中には憂いの情を抱き、それでもなお道に従い、主君を諫めようとしたのである。その作品の中で彼は、上は堯と舜および夏・殷・周三代の偉業を述べ、下は桀・紂・羿・澆らの失敗を述べ、主君が過ちを悟って正しい道に戻り、自身を都に呼び戻してもらいたいという希望を述べたのである。

以上の記述は、日本でも読まれた南宋・朱熹の『楚辭集注』にも引用されている。右の引用部分の前半は「離騷」を屈原が制作した背景を簡潔に述べ、題名の意味を解説したあと、作品の目的と内容の概略をまとめている。語り手は最終的に主君に悔悟を促し、自身の国政への復帰を願うのであるが、注目されるのは、そのために古の聖王たちの偉業や悪逆の王たちの失敗を述べた、と言う箇所である。前者の中には「三代」、つまり夏・殷・周も含まれる。この「夏」は、禹が草創したとされる夏王朝に他ならない。屈原は禹を含む古の王を引き合いに出し、彼らの事績を規範とし、自説の正しさと身

の潔白を訴え、右の目的を果たそうとしたのである(53)。吉川幸次郎氏が説くように、古の規範が理念から制度等に至るまでそれ以後の文化や政治・社会の根幹となる尚古主義が中国文化の第一の特徴であるが(54)、文学作品の語り手が自身の正しさを訴えるために「古」を持ち出さなければならぬことは、作品制作当時の現実において語り手が絶望的に孤立していることをも意味するであろう。「離騷」が神話上、または歴史上の人物を規範とする手法を用いたことにより、以後の「不平の文学」もそれを継承することになった。

このことは劍岳の二首でも同様である。劍岳の「鳴門峽二首」が禹を持ち出したのは、その伝説上の聖王が中華の国土を整備し、文明を開いたことで知られ、更に日本でも信仰されていたことなどが理由として挙げられる。それだけでなく、事業の実現は困難であり、人々の理解をなかなか得られないが、自身の案は必ずや有効で、実現を果たした場合の恩恵は測り知れないことを主張するためでもある。この作品は結果的に右のような中国古典文学における「不平の文学」の理念と手法を継承しているのである。

中国文学における伝統的な評価基準から言えば、劍岳のこ

の作品も「含蓄に欠ける」ものであるのかもしれない。しかし、この二首は伝統的な中国古典詩の政治性を極端な形で受け継いで語り手の建言を具体的に述べると同時に、「不平の文学」の系譜に連なってその手法を継承し、鳴門海峡という名勝を詠う浪漫性をも持ち合わせた独特の詩風を持つと言って良いであろう。

〈第四章〉明治大正漢詩史における「鳴門峽二首」

(一) 明治大正期の漢詩に見える政治・経済の要素

本章では日本漢詩史に本作品を位置づけることを試みる。

前述のように、先行研究は中国文学が政治や社会との双方向的な影響関係を持つと規定するのに対して、日本文学には政治性や社会性を排除しようとする傾向があるという。それでは、その日本における漢詩はどうであったか。

確かに、日本漢詩においても政治や社会等の要素を排除しようとした例は存在した。その典型は、夏目漱石の漢詩である。大正五(一九一六)年八月二十一日付久米正雄・芥川龍之介宛書簡には次のように言う。



僕は不相変「明暗」を午前中書いてゐます。心持は苦痛、快楽、器械的、此三つをかねてゐます。存外涼しいのが何より仕合せです。夫でも毎日百回近くもあんな事を書いてゐると俗了された心持になりますので三四日前から午後の日課として漢詩を作ります。(55)

ここで改めて詳述するまでもなく「明暗」とは彼の未完の作品である。主人公である津田とその妻のお延、そして津田の以前の恋人である清子らの物語を通して、作者が人間のエゴイズムを追究しようとした作品とされる。右の書簡によれば、このような内容の小説を書いていると俗念に塗れ切ってしまう(「俗了」)ような心境に陥ってしまうので、午後は漢詩を作ることを日課としているという。漱石自身のこの記述によれば、漢詩制作は世俗世界のから逃避ということになる。

前述の如く、中国古典文学は政治性や社会性を持つというが、当然のことながら古典詩、日本で言うところの漢詩に詠われるのはそれだけではない。隠逸や山水跋涉など、人間社会を離れた世界を詠った作品が少なからず存在することも確

かである。漱石が「漢詩」と言うとき、それは晋の陶淵明や唐の王維の代表作品のような世界を想定しているようである。彼の初期の作品である『草枕』(明治三九「一九〇六」年)の第一章にも、語り手の独白として、以下のような一節がある。

苦しんだり、怒ったり、騒いだり、泣いたり人は人の世につきものだ。余も三十年の間それを仕通して、飽々とした。飽き々々とした上に芝居や小説で同じ刺激を繰り返しては大変だ。余が欲する詩はそんな世間的の人情を鼓舞する様なものではない。俗念を放棄して、しばらくでも塵界を離れた心持ちになれる詩である。いくら傑作でも人情を離れた芝居はない、理非を絶した小説は少からう。どこ迄も世間を出る事が出来ぬのが彼等の特色である。ことに西洋の詩になると、人事が根本になるから所謂詩歌の純粹なるものも此境を解脱する事を知らぬ。どこ迄も同情だとか、愛だとか、正義だとか、自由だとか、浮世の勸工場にあるものだけで用を弁じて居る。いくら詩的になつても地面の上を馳けあるいて、銭の勘定を忘れるひまがない。シエレーが雲雀を聞いて嘆息したのも無

理はない。うれしい事に東洋の詩歌はそこを解脱したのがある。採菊東籬下、悠然見南山。只それぎりの裏に暑苦しい世の中を丸で忘れた光景が出てくる。垣の向ふに隣りの娘が覗いてる訳でもなければ、南山に親友が奉職して居る次第でもない。超然と出世間的に利害損得の汗を流し去った心持ちになれる。独坐幽篁裏 弹琴復长嘯 深林人不知、明月来相照。只二十字のうちに優に別乾坤を建立して居る。此乾坤の功德は「不如帰」や「金色夜叉」の功德ではない。汽船、汽車、権利、義務、道徳、礼義で疲れ果てた後に、凡てを忘却してぐっすり寐込む様な功德である。(56)。

ここで語り手は西洋の文学と東洋のそれとを比較し、前者が「世間」「浮世」を題材とすることが多く、後者の詩歌にはそれらから離れた「出世間的」な世界があると言ひ、彼自身は後者を是とする。後者の代表として引用されているのは、東晋・陶淵明の五言古詩「飲酒」其五の第五・六句と唐・王维の五言絶句「竹里館」の全文であるが、陶詩は『文選』巻三〇に「雜詩二首」其一と題して収録され、王詩は『唐詩選』

卷六に収録されている。両詩ともに隠逸文学の代表作と見なされる。後述するように『文選』も『唐詩選』も江戸明治期の日本人によく読まれ、寺子屋や私塾のテキストとしても用いられた作品集であった。右の一節は小説の語り手が当時よく知られた漢詩を引用しながら自身の嗜好を述べるといふ形ではあるが、漱石が他の随筆や書簡等で述べる漢詩観と一致しており、彼自身の漢詩観としてしばしば引用される。

但し、漱石も旧知との贈答詩や次韻詩を残している。ここで江戸・明治期の日本の漢詩を見渡せば、山水詩や隠逸詩も少なくないが、それ以外に贈答詩や唱和・次韻詩、宴飲詩、送別・留別詩、追悼詩など、他人との付き合いの中で制作された作品や、性霊派の影響によって都市や地方の風俗、作者の日常生活などを描いた作品(57)、また日中の歴史上の人物や出来事、遺跡などを詠った詠史・懷古詩も多い。明治大正期の漢詩人たちの多くは詩社に参加して他のメンバーと積極的に交際したり、新聞や雑誌に作品を投稿したりし、そのような中で生み出されたのが右に挙げたような作品であった。しかし、漱石は積極的に詩社に参加したり、新聞・雑誌に漢詩だけを投稿したりしていたわけではなく、基本的に漢詩

は自分のために作った。数少ない贈答詩や次韻詩は旧知との交際において、偶々生み出されたものである。漱石自身の漢詩の詩風や漢詩観にも変遷はあるが(58)、右のような彼の漢詩制作活動の在り方は当時の漢詩人として異色であった。

前掲の『草枕』中の語を借りて言えば、鳴門海峡架橋と発電のアイデアを詠った劍岳の「鳴門峽二首」は、まさに「汽船、汽車」や「世間」を具体的に詠った作品であり、漱石の漢詩観の対極に位置する作品であった。しかし、江戸明治期にもこのような功利的な作品が皆無であったわけではない。まずは鳴門漢詩の中のそのような作品を見よう。

・今泉芝軒(？―?)「鳴門行」:「嗚呼壯哉洪濤鳴門險，對之目眩心悸足欲顛。安將此險環四海，長使外虜不容易得窺邊(嗚呼 壯なる哉 洪濤鳴門の險，之に對せば目眩み心悸き足顛ばんと欲す。安んぞ此の險を將て四海に環らし，長く外虜をして容易に邊を窺ふを得ざらしめん) (59)

・前塚芳南(一八五一―一八九五)「鳴門歌」:「可知四海便湯池，形勢所以補神武。君不見扶桑南海之一隅，鳴

門奇險天下無(知るべし 四海便ち湯池なることを，形勢 神武を補ふ所以なり。君 見ずや 扶桑南海の一隅，鳴門の奇險 天下に無きことを) (60)

いずれも鳴門海峡を題材に詠った長編の古詩の末尾部分である。前者の作者である今泉芝軒の生没年は明らかではないが、幕末明治初期にかけて活躍した漢詩人である(61)。前者は、見る者を慄かせる鳴門海峡のような険阻な地形を日本の周りにめぐらすことができれば、外国の勢力を容易に近づけさせることはないであろうと詠う。後者は、日本の周囲の地勢自体が金城湯池であり、それが日本の力を補っていると言い、扶桑南海の一隅にある鳴門海峡の険しさは天下に二つと無いと褒め称えて作品を締めくくる。

これらの作品はいずれも引用部分の前までは鳴門海峡を描写し、引用部分ではこの海峡を天然の要害として国防に役立てることを詠う。鳴門海峡を景勝地としてではなく、功利的な用途に利用しようとする点においては劍岳の作品と共通する。しかし、相違点として、右の二者はあくまで国防に利用する空想的なアイデアを詠うのに対して、劍岳は経済の観点

による利用を具体的に提案することが挙げられる。

右に挙げたのは鳴門漢詩という範囲内の作品である。それ以外にも、例えば日露戦争勃発の直前に制作された伊藤春畝（博文、一八四一—一九〇九）の七言絶句と、それに次韻した金子溪水子（堅太郎、一八五三—一九四二）の七言絶句が注目される。

・伊藤春畝「日露交渉將斷（日露の交渉 將に斷えんとす）」

四十餘年辛苦跡、四十餘年 辛苦の跡、

化爲醉夢碧空飛。化して酔夢と爲り 碧空に飛ぶ。

人生何恨不如意、人生 何ぞ恨まん 意の如くな

らざるを、

興敗憑他一轉機。興敗 他の一轉機に憑る。

・金子溪水子「甲辰二月四日、聖上親臨、廟議決日露開

戰。伊藤公招余、説渡米緊要。熱誠頻勸、乃決意赴米

國。臨別、公示所感詩、仍和其韻以呈（甲辰二月四日、

聖上親臨し、廟議 日露開戰を決す。伊藤公 余を招

き、渡米の緊要を説く。熱誠もて頻りに勧め、乃ち意を決して米國に赴く。別れに臨み、公感ずる所の詩を示し、仍りて其の韻に和して以て呈す）」

樽俎折衝無寸效、樽俎の折衝 寸效無し、

仁川海上礮丸飛。仁川の海上 礮丸飛ばんとす。

米邦幸在同盟外、米邦 幸ひに同盟の外に在り、

獨握平和好轉機。獨り平和の好轉機を握る。（62）

春畝の詩の「他」は米國を指す。当時、日露兩國の關係は悪化し、御前會議で露國との開戦が決まった。その一方で當時枢密院議長であつた春畝は、日露兩國の仲裁を他國に依頼する道をも検討したが、それが可能である國は欧州には無く、当時は中立を保つていた米國を選んだ。そして、当時の米國大統領セオドア・ルーズヴェルトの同窓であつた溪水子の特使として米國に派遣しようとしていた。春畝の詩の日本語訳は以下の通り。「四十餘年にわたつて露國との國交を苦心して維持してきたが、全ての努力も酔っ払いの夢のように青空に消えてしまった。人生は思い通りにいかないことが多いが、それを恨むまい。この度の話は米國の出方によるのだ」。

溪水子の題名の「甲辰」とは、西暦一九〇四年。「樽俎折衝」は漢・劉向の『新序』に由来する語で、宴席での平和な外交交渉を言う。「仁川」は現在の大韓民国西北部の都市。「礮丸」は「砲丸」、つまり大砲の弾のこと。「礮丸飛」は日露両国の交戦を象徴的に表現する。溪水子の詩の日本語訳は以下の通り。「露国との平和な外交交渉では、両国の関係悪化を止めることができなかつた。仁川の西の海上で日露両国は砲撃を交わすことになりそうだ。米国は幸い中立を保っており、彼ら国だけが東アジアの平和のカギを握っているのだ」。

春畝の詩は、題名が無ければ内容を理解できないほど婉曲であり、末句以外の句の表現はそれ以前の漢詩の枠内のものである。それに対して、溪水子の詩は起句こそ中国古典の成語を用いているものの、第二句以降は地名と国名を挙げ、後半二句では明確に今回の戦争の帰結は米国の動き如何によると述べている。この二首は題名が示す通り春畝と溪水子の二人の間でやりとりされたものであるが、当時の緊迫した外交を主題として漢詩に詠っている。この二首は劍岳の「鳴門峽二首」其一の九年前に制作されたものだが、この明治末期における漢詩のメッセージ機能と、天下国家を具体的に詠う傾

向が強く表れたものである。この時代の日本の漢詩というジャンルがその一端を窺い知ることができよう。

そもそも、劍岳や本節でこれまで挙げてきた漢詩の作者たちは、なぜ天下国家のことを短歌・俳句など日本の伝統的な韻文や日本語の散文ではなく、漢詩で詠ったのか。その理由の第一に、日本ではそれまで天下国家を論じるときに好適なジャンルが漢文・漢詩であったことが挙げられる（齋藤氏前掲書『漢文脈と近代日本』序章参照）。江戸明治時代に至り、漢詩文をそれまでになく多くの人々が学び、実作品を制作した。それら実作品の一方の極点は前述の夏目漱石の漢詩のような、人間社会からの逃避を詠った作品である。その一方で、江戸時代後期から明治大正期にかけて、右のように天下国家や社会を積極的に詠う作品も見られた（63）。幕末から明治大正期はまさに日本国内の社会だけでなく、対外関係の大変革期であり、言わば政治と経済および外交の時代であった。そのような世相を文学作品で取り上げる場合、それらの題材と親和性のあつた漢詩文は恰好のジャンルの一つではあつた。右のような日本の幕末から明治大正という時代に、国家・社会という要素を表現する需要が高まり、従来の評価基準には拘

らずにそれらの要素を当時の漢詩人たちは具体的に詠うこともあったのであった。

では、なぜ漢文ではなく漢詩であったか。前述の如く、「平の文学」は中国古典詩の大きなテーマの一つであったが、それは幕末から明治にかけての日本の動乱期にも特に好んで漢詩に詠われた。天下国家の経営を志しつつもその願いを果たせなかった人々、あるいは時々的情勢により、思うように行動できなかった人々は、憤懣や鬱屈を漢詩に詠った（林田氏前掲書参照）。このような作品では天下国家を論じることと併せて壮大な気概や悲憤慷慨が詠われることが多かった。そして、そのような内容は当時の人々に感情的にアピールする力があった。その意味において、劍岳が散文の論説ではなく漢詩に自身のアイデアとそれが理解されないことへの激情を詠ったのは必然であったと言える。この作品に少々の偏りがあるろうとも、それは彼にとつて意に介するに値しないことであつた。しかも、彼がその作品を漢詩雑誌に投稿したのは、幅広い読者に対して感覺的・感情的に自身のアイデアと心情を訴え、支持を呼び掛けようとしたためであろう。

(二) 劍岳と交際を持った漢詩人の鳴門漢詩

次は劍岳と交際を持った漢詩人の鳴門漢詩を見よう。前述の如く、『年譜』によれば彼は久保天随、三谷象雲、新居湘香、岡本対南という漢詩人との交際が確認できる。彼らの鳴門漢詩には別稿一で論じたような作品の型を大きく逸脱するものは無い。但し、岡本対南（由喜三郎。一八七〇—一九五五）（64）の連作「岡崎雜詠」中の次の一首は注目される。

帆影高飛巖樹頭、 帆影 高く飛ぶ 巖樹の頭、

鳴門潮上峽雲流。 鳴門 潮は上りて 峽雲流る。

淡山晴色阿山雨、 淡山は晴色 阿山は雨ふり、

跨海長虹懸二州。 海を跨ぐ長虹 二州に懸く。（65）

「鳴門海峡を飛ぶように速く渡る舟の帆影が崖に生える樹々の頭を過ぎていく。鳴門の潮の上では海峡の間を雲が流れていく。淡路島の山々は晴れている様子だが、阿波の山々の方では雨が降っている。海を渡るように長い虹が両地にかかっている」。

前半は鳴門漢詩にしばしば見える風景描写である。後半で淡路島は晴れているが、阿波は雨が降っていると詠い、そこから末句で両地に虹がかかっていることを描写して作品を締めくくる。中国古典で「虹」とその類語は良くないイメージを帯びることが多いが（66）、対南の右の作品の虹は近代的で審美的なイメージによって詠われていると考えるのが自然な解釈であろう。ここでは鳴門海峡を挟む淡路島と阿波の天気が異なり、海峡に虹がかかっているというのだが、この描写は現代の読者に橋を連想させよう。もちろんこれは我々が大鳴門橋架橋の実現を知っているからこそであるが、劍岳と交流を持った対南が鳴門海峡架橋のアイデアを知り、それを作品に反映させたか、あるいは逆に対南の右の作品から劍岳が思いついたかどうかは明らかではない。いずれにせよ、この作品は、虹の扱いが特殊であるものの、旧来の風景描写を主とする漢詩の枠内に収まったものである。

右の作品と比べても、劍岳の「鳴門峽二首」はそれ以前の鳴門漢詩の豪壮な風景描写は継承しつつ、この地の経済的な利用を具体的に詠った独自性が際立つ。そして、このような劍岳の作品や、前節で挙げた他の鳴門漢詩も、幕末から明治

期にかけての日本漢詩の機能の一つが極端な形で表れた作品であったと位置づけることができる。

（第五章）中川劍岳の漢詩文学習歴と詩風

（一）江戸時代における阿波の教育と劍岳の漢詩文学習歴

本稿最後に、「鳴門峽二首」を制作した中川劍岳という漢詩人の学習歴と詩風について概観する。

本節では劍岳の漢詩文学習歴と阿波における教育の実態を改めて確認しよう。江戸から明治にかけての教育状況に劍岳の学習歴を位置づけることによって、当時の日本の一地方の人物の教養の様相をある程度把握できるはずである。

第一章で彼の略歴を述べたが、『年譜』によれば、彼が東光福良塾で漢学を学んだのは明治四（一八七二）年、十三歳の年であった。上板町史編纂委員会編『上板町史 下巻』（上板町史編纂事務局、一九八一）八二三―五頁によれば、福良塾とは天明年間（一七八一―一七八八）に福良秀右衛門が開いた私塾で、それ以降、一作（一八五一―一九〇一）に至るまで、代々福良家の者が教育に当たった。江戸時代の主な教育

機関として、武士たちの学校である藩校の他、庶民が主に基礎的な算術と読み書きを学ぶ「寺子屋」（または「手習塾」）や、より進んだ内容を学ぶ「私塾」を挙げることができる（67）。私塾の例としては、伊藤仁斎の古義堂や緒方洪庵の適塾が挙げられる。『日本教育史資料九』（富山房、一八九二）の二六八頁によれば、福良塾は私塾に分類されている。

劍岳が当塾で学んだ際の師は、一作の伯父の福良如柳（貞平、一八二二—一八八二）という人物であった。『上板町史 下巻』八二四頁が記録する如柳の墓碑銘には「性好文事、受業於小竹篠崎翁（性 文事を好み、業を小竹篠崎翁に受く）、漢詩文を好み、大坂を中心に活躍した大漢詩人、篠崎小竹（一七八一—一八五一）（68）に漢詩文を学んだと記される。

前掲の『浪華儒林傳』『梅花社の篠崎父子』は小竹がしばしば阿波に出張して人々に教えたと言い、それによれば如柳もそのような機会に小竹に学んだと考えられる。なお、如柳の墓碑銘に刻まれた塾生のリストの中には劍岳の名も見える。劍岳が福良塾に入塾した翌年の明治五（一八七二）年に「学制」が公布されたが、この年に劍岳は家業であった製糖業と農業に従事することになった。その後、明治七（一八七四）

年に福良塾は「東光小学校」と改称し、首席教員（のち首席訓導）に一作が就任した。

それでは福良塾で劍岳は何を学んだのか。江戸時代の寺子屋の主要教科は「習字」「讀書」「算術」で、私塾の場合は更に多様な中国古典も学ぶことが多く、学習内容は幅が広がった（69）。右の主要教科の中で、「讀書」はテキストを音読（素読）し、その表現や内容を身体化する学習のことを指す（70）。福良塾の教育内容を明確に記録した文書は今のところ見当たらないが、前掲の『上板町史 下巻』八一—二頁によれば、上板町の寺子屋では基本の「算術」や「習字」の他、志願者には「実語教」、「童子教」、「古状摘」等の初等教科書だけでなく、中国の基本的な古典である「四書」『論語』『孟子』『大學』『中庸』と「五經」『書經』『易經』『詩經』『春秋』『禮記』（71）、更に進んで『文選』も教えたという。但し、これらは素読であったようだ。『上板町史 下巻』にも福良塾で用いられたテキストに関する具体的な記述は無い。しかし、板野郡教育会編『板野郡誌 下巻』（一九七二、初出は一九二六）一二〇六—七頁の「人物誌・學者」の項目には福良一作の略歴が見えるが、それによると、彼は安政六（一八五九）



年から慶應元（一八六五）年までは伯父の貞平（如柳）から「四書」・「五經」・『文選』等の漢籍を学び、明治元（一八六八）年には岡本賢三郎の私塾で『春秋左傳』『國語』『資治通鑑』『漢書』『史記』『日本外史』等の史書類と詩文制作を学んだあと、明治四年から福良塾で教鞭を執ったという（72）。この記述に拠れば如柳が一作に教えたテキストは「四書」・「五經」・『文選』であったといい、右の『上板町史 下巻』の寺子屋の希望者向けテキストのリストとも一致する。このことから、如柳は劍岳を含む福良塾の塾生たちにも最低限同じテキストを教えていた可能性は高いと考えて良いであろう。

乙竹氏前掲書の第四章には全国の寺子屋の「習字」と「讀書」のテキストのランキングが掲載されている。それによれば、四国の寺子屋の一般的な「讀書」のテキストとしては、右で挙げた「四書」・「五經」・『文選』の他、中国の伝統的な初等識字教科書である『三字經』『千字文』や前掲の『蒙求』、『四書』・「五經」以外の儒教の基本テキストの一つである『孝經』『史記』『春秋左傳』『十八史略』等の史書類、『唐詩選』等の詞華集、『古文真寶』『文章軌範』等の名文集が加えられることが多かったようである。これらと比べれば、前掲の上

板町の寺子屋の主要テキストは地方の寺子屋のそれとしてはやや種類が少ないが（73）、如柳の経歴から推測するに、福良塾で更に進んだレベルの漢詩文も希望者には教授し、劍岳もそこまで学んでいた可能性は大いにある。

別稿一で述べたように、鳴門漢詩には『文選』所収の作品に見られる表現や発想に基づくものが多い。前掲の「不平の文学」の祖である「離騷」も『文選』に収録されている。また、前述の如く、「鳴門峽二首」はいずれも土木工事で名を馳せた伝説上の聖王・禹に言及するが、それへの言及は「五經」に含まれる『詩經』や『尚書』、「四書」の一つである『孟子』に見られる。劍岳が「鳴門峽二首」を制作した際にも、これらの中国古典の学習経験が活かされたに違いない。

『年譜』に拠る限りでは、福良塾を辞めた後、劍岳が他の教育機関等で学んだという記録は無い。しかし、前述の通り、後年、彼は久保天随、三谷象雲、土居香国等の中央の漢詩壇の大物や、新居湘香、岡本対南等の阿波の漢詩壇で活躍していた漢詩人と交際を持ち、その過程においても漢詩文を学んだと思しい。福良塾で用いられたテキストの中に唐宋詩に関するものが含まれていたことを明示する記録は無いが、彼が

塾を辞した後に漢詩を制作し、右の漢詩人と交際したのであれば、唐宋詩についても当然ある程度学んでいたであろう。

「前述のような劍岳の学習歴は当時の漢詩人として特に抜き出たものではない。しかし、それだけに劍岳の作品は、当時の日本の一地方の漢詩人の教養と作詩能力の水準を示す一ケースとして注目されるのである。

## (二) 劍岳の詩風

右のような漢詩文の学習歴と漢詩人との交友を持った劍岳の詩風はどのようなものであったのか。彼の漢詩文を集めた単独の作品集は作成されなかったが、『年譜』巻末の「遺稿」に「鳴門峽二首」のうち其一は「鳴門峽」と題して収録されている。但し、其二は未収録である。徳島県立文書館所蔵「中川家文書」には「鳴門峽二首」の草稿の他にも漢詩作品の草稿等が収められているが、全てを調査してはいない。さしあたり『年譜』巻末に収録されている「遺稿」の漢詩全三十四首を内容によって分類した結果は以下の通りである(74)。

- ・時事…十一首
- ・閑適…五首
- ・懐古・詠史…四首
- ・歳時…三首
- ・遊覧…三首
- ・人生回顧・感慨…三首
- ・時興…二首
- ・言志…一首
- ・勅題…一首
- ・思想…一首

右は便宜上の分類である。一首に複数のテーマが盛り込まれる場合も少なくない。右のリストの分類の中で最も多いのは「時事」十一首である。この種の作品は、「時事偶感」や「時事有感」というタイトルのものが多い。このように、「遺稿」に拠れば、劍岳は好んで時事を漢詩に詠う傾向が強かったと言える(75)。このことから考えれば、「鳴門峽二首」の制作も彼の詩業においては異例というわけではないのである。但し、結果的に連作としてまとめられたこの二首が他の作品と

異なるのは、その公表が周到に行われた点である。これは実業家兼政治家としての彼の経歴だけでなく、当時の日本社会における漢詩という文学ジャンルの影響力の大きさにも起因するであろう。

（終章）中川劍岳「鳴門峽二首」が示すもの

本論で論じてきたように、中川劍岳は、鳴門海峽の架橋と発電のための調査の建議案を帝国議会で提出する前に、そのアイデアを詠った「鳴門峽」其一を雑誌に投稿した。日本の幕末明治大正期には言論の発表が様々なメディアで活発に行われたが、それは漢詩でも同様であった。漢詩雑誌は明治期には雨後の筍の如く創刊され、漢詩文の制作が隆盛していた。そして、当時の著名な漢詩人たちが具体的に天下国家と国際関係を詠った作品や、鳴門海峽を詠う作品において彼以前から国防等の功利的利用を空想的に詠う先行作品が存在したことも、劍岳のこのような作品を育てた土壌となったと考えられる。彼の建議が帝国議会で否決されたあと彼は幾つかのメディアで「鳴門峽二首」を発表し、アイデアの実現を諦め

なかったと見られる。ここから彼のしたたかな計算と粘り、そして当時における漢詩メディアの社会における影響力の大きさ（当時、斜陽期に差し掛かっていたとしても）が改めて了解される。

中国古典詩に政治を詠うにせよ、前述の通りそれは風刺または言志という形を取ることが多く、政策を具体的に詠った詩歌は、前掲の杜甫や王安石の作品のような例を除いて多くはない。もともと中国古典詩は政治性・社会性を志向するものではあったが、政策を具体的に詩に詠うことは、詩歌の伝統的美学から言えば主流ではなかった。しかし、劍岳のこの作品は「不平の文学」の系譜に連なり、その手法を継承している。その結果、この二首の詩は、日本の明治大正という時代の中で伝統的な中国古典詩の政治性を極端な形で受け継ぎ、それ以前の漢詩の評価基準を無視してまで自身の建言を具体的に述べると同時に、自身の意見が世間の人々に理解されない孤独を詠い、更に鳴門海峽という名勝を詠う浪漫性を持ち合わせた独特の作品となったのであった。彼は特に抜きん出た漢詩文の学習歴を持つわけではないが、だからこそその彼が右のような作品を制作したことは、当時の一地方の漢詩人

の教養と作詩の水準を示すものである。

劍岳は好んで時事を漢詩に詠う傾向があったが、彼がこの二首で露骨に政策を詠ったことを伝統的な漢詩観から嗤ったり、また当時の日本社会における漢詩の影響力を現代人の視点から迂遠だと批判したりすることは容易い。しかし、この二首は、明治大正期の日本の一地方の人物にとつての漢詩観、更には教養、そして当時の社会における漢詩の影響力の大きさと当時の日本文学の多様性を現代の我々に教えてくれるのである。

〔注〕

(1) 本稿では漢詩を制作した日本人を「漢詩人」と呼ぶ。むしろ彼らは漢詩のみを制作したのではなく、また、漢詩制作のみを本業とした者ばかりというわけでもない。しかし、本稿の主な対象は漢詩であるため、この呼称を便宜上用いる。他に、「文人」という語も想起されるが、中国古典における狭義の「文人」は、単に文学作品を制作するだけでなく、儒教の素養を身に着け、その理念を実現すべく政治家・官僚としての性質も持つ。この点は日本の漢詩人、少なくとも本稿の

主な対象である江戸明治期の漢詩人の最低条件というわけではない。従って、本稿でこの語は用いない。中国古典の「文人」の概念については、村上哲見「文人・士大夫・読書人」『中國文人論』汲古書院、一九九四所収参照。

(2) 鳴門漢詩については「日本漢詩に描かれた鳴門海峡」(徳島大学総合科学部『言語文化研究』二八、二〇二〇。以後、「別稿一」と呼ぶ)を、鳴門海峡を主題とした漢詩付きの漢文作品については「漢詩付きの「鳴門漢文」に関する試論」(徳島大学総合科学部『言語文化研究』二九、二〇二一。以後、「別稿二」と呼ぶ)参照。

(3) 江戸・京都・大坂の漢詩壇を含む漢学の概略については、中野三敏「三都・地方における漢学の状況」(中国文化叢書九・『日本漢学』大修館書店、一九六八)所収参照。

(4) 台湾が一八九五年に日本の植民地となって以降、台湾総督府民政局長であった後藤新平によって、製糖業の育成が図られた。家業の製糖業を継いだ劍岳はそのような趨勢の中で台湾に進出したのである。日本による台湾における製糖業の概略については伊藤潔『台湾 四百年の歴史と展望』(中公新書、一九九三)第五章、久保亨他『現代中国の歴史 兩岸

三地百年の歩み 第二版（東京大学出版会、二〇一九）第二章を、劍岳の製糖業については、服部一馬「製糖業の近代化と中川虎之助 一」（横浜市立大学経済研究所『経済と貿易』七七〔一九六一〕）と同氏の「製糖業の近代化と中川虎之助 二」（横浜市立大学経済研究所『経済と貿易』七八〔一九六一〕）を参照。

(5) 「香川県立図書館デジタルライブラリー」  
<https://www.library.pref.kagawa.lg.jp/digitalLibrary/sonota/komonjo/detail/DK04800.html> を閲覧。

(6) 其一の底本は、この作品の初出である随鷗吟社『随鷗集』第百十編（大正二〔一九一三〕年十二月二十日発行。大阪大学総合図書館蔵）十八頁に拠った。

(7) 『莊子』「天地篇」大聲不入於里耳，折楊皇考，則嗑然而笑。是故高言不止於衆人之心，至言不出，俗言勝也（大聲里耳に入らず、『折楊』『皇考』には、則ち嗑然として笑ふ。

是の故に高言は衆人の心に止まらず、至言の出でざるは、俗言勝ればなり）（清・郭慶藩『莊子集釋』「中華書局、一九六一」第二冊・四五〇頁）。

(8) 青木正児「嘯」の歴史と字義の変遷」（『中華名物考』

「春秋社、一九五九」所収。初出は一九五七）参照。

(9) 禹の事績と伝説については、袁珂著・伊藤敬一他訳『中国古代神話 2』（みすず書房、一九六〇）第七章、岡村秀典『夏王朝 王権誕生の考古学』（講談社、二〇〇三）、蜂屋邦夫『中国の水の物語 神話と歴史』（法蔵館、二〇二二）第一章・第三節参照。

(10) 十三經注疏本（上海古籍出版社、一九九七）二七〇五頁『孟子注疏』卷五之下。

(11) 清・仇兆鰲『杜詩詳注』（中華書局、一九七九）一一二五頁、卷一四。読者の参考に供するため、原文の全文を挙げておく。「禹廟空山裏，秋風落日斜。荒庭垂橘柚，古屋畫龍蛇。

雲氣嘯青壁，江聲走白沙。早知乘四載，疏鑿控三巴（禹廟空山の裏，秋風落日斜めなり。荒庭 橘柚を垂れ，古屋 龍蛇を畫く。雲氣 青壁に嘯き，江聲 白沙に走る。早に知る四載に乗り，疏鑿して三巴を控くを）。

(12) 「樛」はスパイクのような登山靴を指すという如淳の説もある（『史記』「夏本紀」の集解が引用する如淳の注）。

(13) 日本における禹王信仰と遺跡については、植村善博他著『禹王と治水の地域史』（古今書院、二〇一九）、植村善博

他著『日本禹王事典』（古今書院、二〇二三）概説参照。

(14) 大正十一年刊行の三谷象雲編『海南風雅』を底本とした。

(15) 唐・駱賓王「在江南贈宋五之問」「積水架吳濤，連山橫楚岫（積水 吳濤を架け，連山 楚岫を横たふ）」（『全唐詩』

「上海古籍出版社、一九八六」一九八頁、卷七七）。

(16) 『後漢書』（中華書局、一九六五）一五四―一五頁、卷三。

(17) 前者の意味の早期の例として、「古詩無名人為焦仲卿妻作」「感君區區懷，君既若見錄，不久望君來，君當作盤石（君が區區の懷ひに感ず，君 既に若し錄せらるれば，久しからずして君の來るを望まん，君 當に盤石と作るべし）」（『玉臺新詠珍本二種』「中華書局、二〇一八」一八頁、寒山趙氏覆陳玉父本『玉臺新詠』卷二）を挙げておく。後者の例としては『漢書』（中華書局、一九六二）二九〇八頁、卷六七「楊胡朱梅云傳・楊王孫傳」「何必區區獨守所聞（何必必ずしも區區として獨り聞く所を守らん）」を挙げておく。この一節に対して、唐の顔師古の注は「區區，小意也」と言う。また、ここから「愚かである」「つまらない」ということを意味する用例も派生する。

(18) 唐・李白「古風」其四「羽駕滅去影，颯車絕回輪（羽駕 去影を滅し，颯車 回輪を絶つ）」清・王琦注「颯車，言御風乘雲（颯車，風を御し雲に乗るを言ふなり）」（清・王琦注『李太白全集』「中華書局、一九七七」九四―九五頁、卷二）。

本田種竹に「碓冰山中鑿巖崖通鐵路，颯車出入暗隧者，凡二十有六所，云阿浮圖式是也。詩以紀之（碓冰山中 巖崖を鑿ちて鐵路を通し，颯車 暗隧に出入する者，凡そ二十有六所，阿浮圖式と云ふ是れなり。詩 以て之を紀す）」と題する詩がある（『詩集 日本漢詩 一九』「汲古書院、一九八九」二九六頁、『懷古田舎詩存』卷三）。種竹は阿波出身で、明治期に活躍した大漢詩人である。

(19) 『淮南子』「覽冥訓」「往古之時，四極廢，九州裂，天不兼覆，地不周載，火熾炎而不滅，水浩洋而不息，猛獸食颯民，鷲鳥攫老弱。於是女媧鍊五色石以補蒼天，斷鼈足以立四極，殺黑龍以濟冀州，積蘆灰以止淫水。蒼天補，四極正，淫水涸，冀州平，狡蟲死，颯民生（往古の時，四極廢れ，九州裂け，天 兼ねて覆はず，地 周ねく載せず，火 熾炎として滅えず，水 浩洋として息まず，猛獸 颯民を食らひ，鷲鳥 老弱を攫ふ。是に於て女媧 五色の石を鍊りて以て蒼天を補ひ，

龍足を断ちて以て四極を立て、黒龍を殺して以て冀州を濟ひ、蘆灰を積みて以て淫水を止む。蒼天 補はれ、四極 正しく、淫水 涸れ、冀州 平らぎ、狡蟲 死し、顛民 生く」(劉文典『淮南鴻烈集解』「中華書局、一九八九」二〇六・七頁、卷六)。また、袁珂著・伊藤敬一他訳『中国古代神話 1』(みすず書房、一九六〇)第二章も参照。

(20)『年譜』には、建議案中の次の一節が引用されている。「阿淡海峽ノ鳴門ニ橋梁ヲ架設シ、本土ト四國間ノ交通ヲ完全ナラシムルノ目的ヲ以テ、政府ハ之ニ關スル諸般ノ調査及ビ工費ノ算出等ヲ爲シ、且ツ阿淡海峽ノ鳴門潮流ヲ利用シテ電力ヲ起シ得ルヤ否ヤ調査研究セラレンコトヲ望ム」(句読点と一部の助詞は引用者が補った)。

(21)徳島県立文書館所蔵『中川家文書』には大正二年の「漢詩草稿」という文書が含まれており、その中に其一の草稿が認められるが、ここでは「鳴門」と題されている。

(22)木下彪『明治詩話』(岩波文庫、二〇一五。初出は一九四三)卷之中・其一、日夏耿之介『改訂増補 明治大正詩史 卷ノ下』(東京創元社、一九四八)外編・第一章・第三項、猪口篤志『日本漢文學史』(角川書店、一九八四)第六章・第三

項「発表機関としての新聞・雑誌」、三浦叶『明治漢文學史』(汲古書院、一九九八)上篇・第一部を参照。

(23)三浦叶『明治漢文學史』七七頁・第三章「第三期(三十年前後より末年まで)」は、『隨鷗集』と当時の漢詩壇について次のように述べる。「漢詩壇がますます衰微し、漢詩雑誌が創刊されたものの長続きしなかった具体例を挙げて―引用者補)以上の如く数種の雑誌が次々と発行されたが、詩壇が振るわず永續しなかった。そこでこの詩壇の頹勢を挽回する為に興ったのが大久保湘南の隨鷗吟社である。三十七年十月より『隨鷗集』を発行したが、新興の氣力を欠き思う程の力はなかった。然し昭和の時代まで続刊されており、まづ当代を代表するものとして注目している」。

(24)隨鷗吟社と『隨鷗集』については、山辺進「隨鷗吟社の創立に就いて―明治後期に於ける漢詩結社の活動―」(『二松学舎大学東アジア学術総合研究所集刊』三六、二〇〇六)参照。また、劍岳による製糖業に関する政策の提案において、伊藤博文や渋沢栄一と関係を持ったことは、服部氏前掲論文「製糖業の近代化と中川虎之助 二」参照。

(25)土居香国が官吏として徳島に居を構えたのは、明治十

(一八七七)年から十二(一八七九)年までであった。このことと、彼の劍岳の詩への評語に見える「卅餘年後」という記述は符合する。香国の略歴や漢詩活動については、岡林清水「土居香國 一八五〇—一九二一」、『続 土佐の近代文学者たち』(土佐出版社、一九八八)所収) 参照。

(26) 或いは、篠原瓊浦(一八六五—一九三八)のことを指すかもしれない。前掲の『鳴門市史・別巻』八五—一三頁は詩二首を収録するが、それに付された略歴によれば、瓊浦の本名は一で、板野郡鳴門町高島の人。塩業を営み、県会議員を務めたという。劍岳とも郷里が近く、実業家かつ政治家、そして漢詩人でもあったことよって、劍岳と旧知であった可能性は大いにある。

(27) 『海南風雅』に収録されている劍岳の他の漢詩は以下の通り。「壬戌歲首有作」「辛酉歲晚三首」「大道」。

(28) 読者の参考に供するために、『海南風雅』牧野謙序文の全文を引用しておく。「海南之洲、阿讚土豫、隔海而山險、民艱往來、風俗人心、亦疏而不一。方維新改革、每州仍各置縣以治之、爲此也。象雲三谷君、讚人、文雅嗜詩、間者輯四州人士所作、爲一書、曰海南風雅、屬予序之。予謂詩者言志也。

古有采詩之官、訪風察俗。今夫四州情狀、既已如是、則其爲詩也、觀感寄託、自有不同者存焉。讀者苟能諷詠而玩索之、亦可以知其志所嚮矣。蓋其裨資藝林也。豈少小云乎哉。抑予因焉而有感也。昔者戰國時、長曾我部氏起于土、登雲邊山、俯瞰四州、慨然有混同之志、會豐太閤南征而不果。今者王室中興、大一統之治、非復昔者之比。然海內詞壇作家之眾、譬諸當時群雄角逐爭勝。四州人士所作、其能登雲邊而慨然混同者、果誰也歟。其能旗鼓堂堂、敵太閤大軍者、果誰也歟。且予聞之、詩與風俗上下、風俗與化推移。顧予亦讚人、出鄉三十年矣。其間王化宣布、舟車之便大開、往來日密、風俗人心、渾然融和、則其詩也、觀感寄託、必有雍容風雅歌頌盛世者矣。然則象雲此舉、不唯裨資區區藝林也。爲國家者、又可以覽閱而施于有政也夫。大正壬戌夏至後五日。漢洲牧野謙撰于東京之僑宅是誰廬(海南の洲は、阿讚土豫なり、海を隔てて山險しく、民 往來に艱しみ、風俗人心、亦た疏にして一ならず。方に維新 革を改め、每州 仍ほ各おの縣を置きて以て之を治むるは、此れが爲めなり。象雲三谷君は、讚人なり、文雅にして詩を嗜み、間者このころ四州の人士の作る所を輯め、一書と爲し、海南風雅と曰ふ、予に屬して之に序せしむ。予



謂ふ 詩は志を言ふなり。古に采詩の官有り、風を訪ね俗を察す。今 夫れ 四州の情狀、既に已に是くの如ければ、則ち其れ詩を爲るや、觀感して寄託し、自ら同じからざる者存す。讀者 苟くも能く諷詠して之を玩索すれば、亦た以て其の志の嚮かふ所を知るべし。蓋し其れ藝林に裨資せん。豈に少小と云はんや。抑も予 焉に因りて感有るなるなり。昔者 戰國の時、長曾我部氏 土に起ち、雲邊山に登り、四州を俯瞰せんとし、慨然と混同の志有るも、豊太閤の南征に會ひ果たさず。今者 王室中興し、大一統の治あり、復た昔者の比に非ず。然るに海内詞壇作家の眾く、諸れを當時の群雄の角逐し勝つを争ふに譬ふ。四州の人士の作る所、其れ能く雲邊に登り慨然として混同を圖らんとする者は、果たして誰ならん。其れ能く旗鼓堂堂として、太閤の大軍に敵する者は、果たして誰ならん。且つ予 之を聞く、詩と風俗と上下し、風俗と化と推移すと。顧るに 予も亦た讚人なり、郷を出づること三十年なり。其の間 王化宣布し、舟車の便 大きく開け、往來 日びに密なり、風俗人心、渾然と融和すれば、則ち其の詩や、觀感寄託、必ずや雍容として風雅にして盛世を歌頌する者有らん。然らば則ち象雲の此の擧、唯だ區區たる

藝林に裨資するのみにあらざるなり。國家を爲むる者、又た以て覽閱し有政に施すべきかな。大正壬戌 夏至の後 五日。漢洲牧野謙 于東京の僑宅是誰廬にて撰す。この中で、「詩與風俗上下、風俗與化推移」という一節は、後述する中国古典文学の伝統的なテーゼである。

(29) 一例として、鈴木修次『中國文學と日本文學』(東京書籍、一九七八)第一章「文學觀の違い」、第二章「風雅と諷刺」を挙げておく。

(30) 杜甫の社会批判詩の源流については葛曉音「論杜甫的新題樂府」『詩國高潮與盛唐文化』(北京大學出版社、一九九八)収録。初出は一九九六) 参照。杜甫の社会批判詩とその技法については、鈴木修次「杜甫論」(『唐代詩人論』)「鳳出版、一九七三」収録)、谷口真由実「杜甫の詩的葛藤と社会意識」(汲古書院、二〇一三) 第三編「社会意識と社会批判詩」内乱の中での詩的創造」と同氏の「杜甫の社会批判詩と諷諭詩への道」(松原朗編『杜甫と玄宗皇帝の時代』)「勉誠出版・アジア遊学二二〇、二〇一八」収録)、遠藤星希「杜甫「兵車行」」(『杜甫と玄宗皇帝の時代』収録) 参照。白居易の「諷諭詩」については静永健『白居易「諷諭詩」の研究』(勉誠出版、

二〇〇〇) 序説と中編参照。

(31) 杜甫が散文で政策を具体的に述べたことについては、谷口氏前掲書第三編・第一章「華州司功參軍時代の杜甫―「乾元元年華州試進士策問五首」にみる問題意識―」(初出は二〇〇五) 参照。また、白居易について言えば、彼が「新樂府」や「秦中吟」を制作したのは、諫官であった左拾遺に身を置いていた時期であったが、職務としての諫言は散文(「啓奏」)で行われていた。それでも足りずに詩歌にも政治や社会の矛盾を風刺して詠ったという(以上の経緯は「與元九書」に白居易自身が記している)。そして、散文での諫言と詩歌での風刺の違いについて、莫砺鋒氏は端的に次のように言う。「兩者の區別僅僅在於、諫書は直接的抨擊，而諷諭詩則是間接的諷刺(兩者「散文での諫言と「諷諭詩」」の區別はわずかに以下の点にある。諫書は直接的な糾弾であるのに対して、「諷諭詩」は間接的な風刺であることである。)(『莫砺鋒評説白居易』「安徽文芸出版社、二〇一〇」六九頁)。

(32) 十三經注疏本、二七一―二頁『毛詩正義』卷一之一・國風「周南」。この『毛詩』大序は、「毛詩序」と題して、『文選』卷四五にも収録されている。

(33) ここでは子どもにさえ自宅の屋根の一部を奪われるというみじめな境遇を述べ、そこから飛躍して天下の貧しい人々を救済する空想的なアイデアを述べて作品を締めくくること自体がこの作品の主眼であり、そもそも具体的にそれを行うように実現するかは考えられていない。

(34) 黒川洋一『杜甫の研究』(創文社、一九七七)第五章「日本における杜詩」第一節「日本における杜詩享受の歴史」(初出は一九六六)参照。

(35) 但し、これは杜甫の政治思想が軽薄で中身が無いということは意味しない。杜甫の政治思想については、莫砺鋒『杜甫評傳』(南京大学出版社、一九九三)第四章「志在天下的人生信念與致君堯舜的政治思想」参照。

(36) 宋・李壁箋注『王荊文公詩箋注』(上海古籍出版社、二〇一〇)四二八頁、卷一七。

(37) 『王安石』(岩波書店・中国詩人選集二集、一九六二)一七頁。

(38) 佐伯富『王安石』(中公文庫、一九九〇。初出は一九四一)「王安石の新法」、周藤吉之・中嶋敏『五代と宋の興亡』(講談社学術文庫、二〇〇四。初出は一九七四)第五章「王

安石の新法」、三浦國雄『王安石』（集英社・中国の人と思想⑦、一九八五）「安石起つ」参照。

(39) 同様の作品として、「兼井」『王荆文公詩箋注』一四七一―一八頁、卷六）も挙げておく。

(40) 清・何文煥『歷代詩話』（中華書局、一九八一）四一九頁。

(41) 『石林詩話』卷上「王荆公晚年詩律尤精嚴，造語用字，間不容髮。然意與言會，言隨意遣，渾然天成，殆不見有牽率排比處（王荆公の晩年 詩律 尤も精嚴にして，造語用字，間に髪を容れず。然るに意と言と會ひ，言 意に隨ひて遣り，渾然として天成し，殆ど牽率排比の處有るを見ず）」『歷代詩話』四〇六頁。

(42) 梅堯臣のことは歐陽脩に語ったもので、宋・歐陽脩『六一詩話』（清・何文煥『歷代詩話』二六七頁）所収。宋・嚴羽のことは『滄浪詩話』「詩辨」『滄浪詩話校釋』「人民文学出版社、一九六一」二六頁）に見える。

(43) このことについて論じた書物も無数にあると言ってよいが、この思想の系譜と諸問題についてまとめた最近の書物として、永田知之『理論と批評 古典中国の文学思潮』（臨川

書店、二〇一九）第二部「言説の系譜」第六章「言葉による表現の可能性」を参照。

(44) 中国古典文学評論史における杜甫の評価とその意義については先行する專著の多くが指摘していることである。前掲の黒川氏と莫氏の著書に加えて、鈴木修次氏の『杜甫』（清水書院、一九八〇）Ⅲ「杜甫の文学思想」も参照。

(45) 『文学論集』（朝日新聞社・中国文明選一三、一九七二）三〇〇頁「滄浪詩話」「詩弁」解説（荒井健担当）参照。

(46) さしあたり戦後の二人の評者の王安石評を挙げておく。錢鍾書は『宋詩選註』（人民文学出版社、一九九七。初出は一九五七）四一頁・王安石総論で次のように述べる。「他比歐陽脩淵博，更講究修詞的技巧，因此儘管他自己的作品大部分內容充實，把鋒芒厚利的語言時常斬截乾脆得不留餘地，沒有回味的表達了新穎的意思，而後來宋詩的形式主義却也是他培養了根芽（王安石は歐陽脩より学識が広く、修辭的技巧を追求した。それによって、彼の作品のほとんどの内容は充實しており、鋭利な刃物のようなことばでいつもきっぱりと言いつて解釈の余地や余韻を残さず、新たな内容を表現している。しかし、そのような彼の詩風が後の宋詩の形式主義の芽を育

ることになつてしまつた」。また、章培恒・駱玉明主編『中國文學史 中卷』（関西大学出版部、二〇一三）。原著は二〇一一）第四編・第六章・第三節（陳正宏担当）は、王安石が政治について詠つた前半生の作品を、「文を以て詩を為る」特徴が表れ、読者を強く感動させるものが無いと批判する。なお、本稿の本節の執筆に際して、この二つの書物の他に、以下の書物から多くの裨益を得た。游国恩等主編『中國文學史 三』（人民文学出版社、一九六四）第五編・第一章、程千帆・呉新雷『兩宋文學史』（上海古籍出版社、一九九一）第二章・第三節、吉川幸次郎『宋詩概説』（岩波書店・中国詩人選集二集一、一九六二）第三章・第一節、清水茂『王安石』（岩波書店、一九六二）「解説」、横山伊勢雄「王安石の詩と詩論」（『宋代文人の詩と詩論』創文社、二〇〇九）所収。初出は一九七四）。

（47）詩界革命については、島田久美子『黄遵憲』（岩波書店・中国詩人選集二集一五、一九六三）解説と、近藤光男『清詩選』（集英社・漢詩大系二二、一九六七）解説、倉田貞美『清末民初を中心とした中國近代詩の研究』（大修館書店、一九六九）第二編、村上吉廣『清詩』（明治書院・中国の名詩鑑賞一〇、一九七六）解説、夏曉虹『詩界十記』（浙江文芸出版社、

一九九七）、宇野直人『漢詩の歴史』（東方書店、二〇〇五）第一章「集大成、そして外圧による昂揚―清代の詩」第三節参照。

（48）『晉書』（中華書局、一九七四）一〇二八頁、卷三四「預又以孟津渡險，有覆沒之患，請建河橋于富平津。議者以爲殷周所都，歷聖賢而不作者，必不可立故也。預曰，造舟爲梁，則河橋之謂也。及橋成，帝從百僚臨會，舉觴屬預曰，非君，此橋不立也。對曰，非陛下之明，臣亦不得施其微巧（「杜」預又た孟津の渡しの險にして，覆沒の患有るを以て，河橋を富平津に建つことを請ふ。議者以爲へらく 殷周の都する所，聖賢を歴て作らざるは，必ず立つべからざるが故なりと。預曰く，舟を造り梁と爲すとは，則ち河橋の謂ひなりと。橋の成るに及び，帝 百僚を従へて臨會し，觴を擧げて預に屬して曰く，君に非ずんば，此の橋立たざるなりと。對へて曰く，陛下の明に非ずんば，臣も亦た其の微巧を施すことを得ざるなりと）」

（49）『蒙求』の概説と日本の普及については、早川光三郎『蒙求 上』（明治書院・新釈漢文大系、一九七三）の序説と解説を参照。

(50) 作品の訳注と解説については、紫陽会『大沼枕山』歴代詠史百律』の研究』(汲古書院、二〇二〇)二〇七―二一三頁(執筆担当・大村和人) 参照。

(51) 「離騷」の屈原像とその継承については矢田尚子『楚辞「離騷」を読む―悲劇の忠臣・屈原の人物像をめぐる―』(東北大学出版会、二〇一八)を、屈原を含む不平を主題とする中国古典文学の系譜については大木康『不平の中国文学史』(筑摩書房、一九九六) 参照。

(52) 宋・洪興祖『楚辞補注』(中華書局、一九八三) 一一二頁。

(53) 例えば、「離騷」に「湯禹儼而祗敬兮，周論道而莫差。擧賢而授能兮，循繩墨而不頗(湯禹 儼みて祗敬し，周く道を論じて差ある莫し。賢を擧げて能に授け，繩墨に循ひて頗ならず)。(『楚辞補注』二三頁)、偉大なる禹王は身を慎んで神々に敬虔に奉仕し、進むべきあらゆる選択肢を検討して誤った道を選ぶことがなく、賢者を推挙して有能な者に職位を授け、墨縄で引かれたような公明正大なやり方に従って偏ることが無かったと言い、主君のあるべき姿を説く。

(54) 「支那人の古典とその生活」(『吉川幸次郎全集 二』

『筑摩書房、一九六八』所収。元は一九四三年東京帝国大学における講義録) 参照。

(55) 『定本 漱石全集 第二十四巻 書簡 下』(岩波書店、二〇一九) 四三三―四頁。

(56) 『定本 漱石全集 第三巻 草枕・二百十日・野分』(岩波書店、二〇一七) 九―一〇頁。他に、漢詩を交える小説『草枕』や漢文的な美文調で全編が語られる『虞美人草』においては、漢詩・漢文およびその性質が小説自体を成り立たせる重要なファクターであると齋藤希史氏は論じる。詳細は齋藤氏の「漱石と漢詩文―修辞と批評」を参照(山口直孝編『漢文脈の漱石』(翰林書房、二〇一八) 所収)。

(57) 日本の性霊派については揖斐高「性霊論―江戸漢詩における古典主義の克服―」(前掲『江戸詩歌論』所収。初出は一九九三)を、風俗詩については揖斐高「竹枝の時代―江戸後期の風俗詩―」(『江戸詩歌論』(汲古書院、一九九八) 収録)、新稲法子「竹枝詞の変容―詩風変遷と日本化―」(『アジア遊学』二二九 文化装置としての日本漢文学)、『勉誠出版、二〇一九』収録) および拙稿「森春濤「阿波風土詩」をめぐる」(徳島大学総合科学部『言語文化研究』三〇、二〇二二) 参

照。

(58) 和田利男氏は漱石の漢詩創作の経歴を以下の四期に分ける。第一期は少年時代から明治三十三年に英国留学に赴くまで、第二期は明治四十三年七月から十月までの所謂「修善寺の大患」時代、第三期は明治四十五年五月から大正五年春までの南面趣味時代、第四期は大正五年八月から十一月までの『明暗』執筆時期。詳細は和田氏の『漱石漢詩研究』(人文書院、一九三七。二〇一六年には、これを再編集して抜粋した文章を収めた『漱石の漢詩』が文藝春秋社から出版された)概説篇第三章参照。また、齋藤希史氏は、英国留学期から修善寺の大患の直前までの期間、つまり漱石が小説家として活動を開始した時期に漢詩作品が少ないことを指摘し、その前後の漢詩の漱石における意義の違いを論じている。齋藤氏の『漢文脈と近代日本 もう一つのことばの世界』(NHKブックス、二〇〇七)終章参照。

(59) 『日本名勝詩選』(二八九九)第五集。引用は『鳴門市史・別巻』七四八頁に拠った。

(60) 前塚芳南『明治雅頌』(二八八六)第八集。引用は『鳴門市史・別巻』八二〇―二頁に拠った。

(61) 摂津生まれの政治家・実業家である豊田文三郎(一八五三―一八九六)が今泉芝軒に学んだが、その死後、藤沢南岳に学び、明治九(一八七六)年に自由民権運動に身を投じたという『大阪人物辞典』[清文堂出版、二〇〇〇]七九二頁参照)。文三郎が南岳に学んだ期間はこの出典には明記されていないが、これらのことから、芝軒は明治初期に死去したと考えられよう。

(62) 春畝の詩は塩谷温編『興國詩選 皇朝篇』(弘道館、一九三一。「国立国会図書館デジタルコレクション」[<https://dl.ndl.go.jp/pid/1258763/1/1>]にて閲覧)一一二―一三頁に、溪水子の唱和詩は同書の二一五頁に収録。

(63) 但し、このことは地域差も存在したようである。日野龍夫氏は、江戸時代の江戸の詩人の作品より、京阪の詩人の作品には社会的題材に関心を寄せ、それを漢詩に詠うことを好む傾向があることを指摘している。日野氏が主に比較しているのは、江戸の大沼枕山と大坂の篠崎小竹が農民を詠った作品である(『幕末の京阪詩壇』『日野龍夫著作集第一巻 江戸の儒学』「べりかん社、二〇〇五」所収。初出は二〇〇〇)参照)。また、備中高松藩の儒者にして家老であった山田方

谷（一八〇五—一八七〇）は、「詠時事二十二首」等の幕末の社会の矛盾を描き、諷刺した作品を多数残している。その実作品は杜甫のように描写力に優れ、諷刺は鋭いが、やはり具體的な対策を詠うわけではない。詳細は林田慎之助『幕末維新の漢詩 志士たちの人生を読む』（筑摩書房、二〇一四）「山田方谷—何処の青山か骨を埋めざらん」参照。

（64）岡本対南は金沢勝の子として生まれたが、十七歳の時に儒家・教育家の岡本斯文の家を継いだ。徳島中学校（現城南高等学校）、明治法律学校を卒業し、大坂の藤沢南岳の泊園書院で漢文学を学んだ。その後、徳島中学校で三十五年間、漢文を教えた。昭和三（一九二八）年には漢詩の同好会を開設した。この同好会は戦後、「逍遙会」と合併し、「逍遙同好会」となった。以上の略歴は『徳島市史』第四卷「教育・文化編」（徳島市教育委員会、一九九三）六七九—六八〇頁に拠った。劍岳の墓碑銘は岡本対南が執筆しており、『年譜』の末尾に全文が掲載されている。また、現存する彼の作品集の一つである『對南詩鈔』第二集（逍遙同好會、一九五四）に、劍岳の追悼詩が収録されている。

（65）徳島市立図書館蔵『對南文詩鈔』（一九二八）下巻・詩

篇収録。

（66）聞一多『中国神話』（中島みどり訳、平凡社東洋文庫、一九八九）所収「高唐神女伝説の分析」と、佐藤保『漢詩のイメージ』（大修館書店、一九九二）第一部・第一章参照。

（67）日本近世の教育の分類の詳細については、沖田行司『日本国民をつくった教育 寺子屋からGHQの占領教育政策まで』（ミネルヴァ書房、二〇一七）第一部「江戸の教育遺産を知る」第一章と第三章を参照。

（68）篠崎小竹については、石濱純太郎『浪華儒林傳』（全国書房、一九四二）所収「梅花社の篠崎父子」、猪口氏前掲書三六五—八頁・第五章・第十七節、富士川英郎「篠崎小竹」（『江戸後期の詩人たち』）「平凡社東洋文庫、二〇一二。初出は一九六六」収録）および宇野直人『日本の漢詩 鎌倉から昭和へ』（明徳出版社、二〇一七）第九章参照。前掲の日野氏の論考が指摘するように社会的題材を好んで詠う傾向が篠崎小竹に認められるのであれば、小竹の孫弟子に当たる劍岳が、師を介して小竹の詩風を学んだ可能性も生じる。

（69）沖田氏前掲書および乙竹岩造『日本庶民教育史 下巻』（臨川書店、一九七〇）第四章参照。

(70) 「素読」と「讀書」については辻本雅史『「学び」の復権 模倣と習熟』(岩波現代文庫、二〇一二)初出は一九九九)第二章と同氏の「素読の教育文化」(『東アジア海域に漕ぎだす五 訓読から見直す東アジア』(東京大学出版会、二〇一四)所収) 参照。

(71) 「四書」「五經」とそれぞれの概略については、竹内照夫『四書五經入門』(平凡社ライブラリー、二〇〇〇) 参照。  
(72) この内容は、『上板町史 下巻』の八二五頁にも引用されている。

(73) 近世近代の一般的な漢詩文の教育内容とテキストについては、乙竹氏前掲書の他、辻本雅史『「学び」の復権 模倣と習熟』第一・二章と阿部和正「漢学塾のなかの漱石―漱石初期文芸における「漢学者」(山口直孝編『漢文脈の漱石』翰林書房、二〇一八)所収) 参照。

(74) この他、散文としては、明治二十二年に廈門で死去した弟惣三郎のために劍岳が制作した墓誌銘が、『年譜』の当該年の項目に掲載されている。

(75) 大正二年に劍岳は「癸丑(大正二年)中秋鳴門旗亭書懷」(『年譜』卷末・遺稿編収録。発表誌不明) という作品も制作

している。読者の参考にするため、原文と訓読を引用しておく。「金陵飛烽發雷電，都下悲風擊筑歌。義氣滿胸吾未老，獨觀明月慨思多。白日青天憂國時，一聲杜宇報師期。海樓舉酒烟波裏，談論興亡肩霧披(金陵の飛烽 雷電發し，都下の悲風 筑を撃ち歌ふ。義氣 胸に滿ち 吾れ未だ老いず，獨り明月を觀て慨思多し。白日 青天 國を憂ふる時，一聲 杜宇 師を報じる期。海樓 酒を舉ぐ烟波の裏，興亡を談論すれば肩霧披かん)」。頸聯から推測するに、この作品は前年(大正一「一九二二年)に陸軍師団問題で上原陸相が辞職し、第二次西園寺内閣が辞職に追い込まれ、翌大正二年に桂太郎内閣発足し、第一次護憲運動が始まった一連の政局に触発されて詠われたものようである。劍岳が時局を詠った点、そして中秋に鳴門で詠った点において注目される。

※『隨鷗集』閲覧の便宜を図っていただいた大阪大学総合図書館と、「中川家文書」閲覧の便宜を図っていただいた徳島県立図書館、『對南文詩鈔』閲覧の便宜を図っていただいた徳島市立図書館には、この場を借りて感謝申し上げます。



## 【内容提要】

日本明治大正時代活躍の中川劍岳製作了《鳴門峽二首》，他不但在這兩首詩裡描寫了鳴門海峽的浪漫風景，而且具體地歌詠了經濟政策的建議。具體來說，這個建議的內容就是在鳴門海峽上架橋和發電的。

劍岳大正三（一九一四）年在日本帝國議會上建議了在鳴門海峽上架橋和發電，但是這建議遭到了否決。有的人以為他在《鳴門峽二首》其一裡表明對這挫折的不滿和憤慨。

但是，事實上劍岳大正二（一九一三）年已經在漢詩雜誌《隨鷗集》第一百十編上發表了《鳴門峽二首》其一。從此可知，在帝國議會上建議之前，為了讓大家知道他的主意，他發表了這首詩。我們可以了解他辦事真周到，漢詩對當時社會的影響很大。

《鳴門峽二首》具體地歌詠了經濟政策的建議，按中國傳統文學思想而說，這種詩歌“沒有回味”。中國古典詩也歌詠政治和社會的情況，但是這種詩大都委婉地諷刺這些情況。

可是這並不意味著這兩首詩沒繼承中國古典的傳統。經過研究，我們發現這兩首繼承從《楚辭·離騷》開始的中國古典的“埋怨的文學”的傳統。從此，我們可以說劍岳的這兩首詩兼

有歌詠經濟政策的建議的現代性、歌詠鳴門海峽風景的浪漫性和中國傳統“埋怨的文學”的特性。而我們可以了解這兩首詩顯示當時某一地方人的教養和製作漢詩的力量水平。